

2021 年度
FD 関連研修会 活動報告書

佛教大学 教育推進部 教育推進課

『2021 年度 FD 関連研修会報告書』 発刊にあたって

教育推進機構長

岡崎 祐司

本学では、教育推進機構会議での検討をふまえ、授業改善のための研修会や授業アンケート、シラバス点検などを行っています。われわれ大学教職員には「教育の質」を保証する責務があることはいまでもありませんが、コロナウイルス感染症拡大のなかでいかに学生の学修を保障するのか、対面・遠隔の授業改善にどう取り組むのかなど、FD 活動には新たなレベルが求められているように思います。

2021 年度は 2020 年度よりは対面授業を増やしましたが、遠隔授業も継続しています。遠隔授業導入から 1 年以上がたちましたが、いったい学生は遠隔授業についてどのように感じているのだろうか、それを把握するため 1、2 年生を対象として「コロナ禍における学習実態調査」を実施しました。調査結果をみると、遠隔授業に対して必ずしも否定的に捉えているわけではなく、これからも受講したいと答えた学生の割合は低くありませんでした。今後、遠隔授業は対面授業の代替という位置づけではなく、コンテンツの充実や方法の工夫によって教育効果のある授業形態として定着することは確実だと思います。

コロナ禍のなかで大学教員は、さまざまな工夫を凝らし試行錯誤しながら遠隔授業に取り組んできました。そこで、機構として学生の評価の高かった授業をピックアップし、担当の教員から工夫している点、大変なところ、学生の反応をどうとらえているかなどを率直に語ってもらう事例発表の研修会を実施しました。

受講生一人ひとりを意識し、どうすれば理解してもらえるか、どうすれば学びの面白さを感じてくれるのか、どう主体的に取り組んでもらうのかなど教員が一生懸命に「格闘」している授業は、学生の心に響き、達成感につながる、それは遠隔でも対面でも同様であることを、研修を通して確信しました。もっとも、オンデマンド授業は受講生の自己管理がいっそう重要なこと、学修の「実感」を得るには「リアルな教員—学生関係」がいっそう重要なこと、遠隔授業では学ぶ側の学修姿勢が非常に重要なことも明らかです。

昨年度の報告では「対面授業と遠隔授業を二者択一のものにとらえるのではなく、両者のよいところを活かしながら、授業作りをすすめていかなければなりません」と書きましたが、今回の学修実態調査の結果は、さらにそれを強く意識させるものとなりました。遠隔授業の事例発表では、専門領域に関わらず授業作りのヒントが多く詰まっていますので、ぜひご覧いただきたいと思います。

教育推進機構・部では今後も FD 活動を推進していきます。この報告書が、先生方の授業運営や学生支援に役立てば幸いです。

目次

2021 年度教員研修会

- ・ 2021 年度 FD 研修会実施一覧----- 3
- ・ 第 1 回 FD 研究会報告
「遠隔授業の授業設計～4 つの事例から今学期の遠隔授業を考える～」 ----4
- ・ 第 3 回 FD 研究会報告
「学生アンケートから見る Google Classroom の使い方」【前編】 -----10
「学生アンケートから見る Google Classroom の使い方」【後編】 -----33
- ・ 2022 年度に向けたシラバス作成研修会-----42

2021 年度その他活動

- ・ 第 1 回佛教大学教員職員合同研修 [シリーズ I]
コロナ禍のなかの学生生活ー学生生活・遠隔授業・学生支援ー -----53
- ・ 第 2 回佛教大学教員職員合同研修 [シリーズ II]
学生支援の新たな地平を探るー学生の声をもとにー -----81
- ・ 2021 (令和 3) 年度コロナ禍における学習実態調査結果-----92
- ・ FD 関連研修会 参加報告書-----105

2021 年度教員研修会・学部（学科）

FD 研修会

2021年度FD研修会実施一覧

全体FD研修

日程	時間	場所	対象	テーマ	参加者数
2021年4月28日(水) ※オンデマンドは、 2021年5月13日(木) ～2021年6月11日(金)	16:10～18:00	Zoom(同時双方向)・ オンデマンド	専任教員 非常勤講師	第1回FD研究会 遠隔授業の授業設計 ～4つの事例から今学期の遠隔授業を考える～	105
2021年12月15日(水) ～2022年3月10日(木)	—	オンデマンド	専任教員	第2回FD研究会 初年次教育科目の成績評価について	118
2021年12月20日(月) ～2022年3月24日(木)	—	オンデマンド	専任教員 非常勤講師	2022年度に向けたシラバス作成研修会	-
2022年3月29日(火) ～2022年5月31日(火) ※【番外編】は2022年5月10 日(火)～7月29日(金)	—	オンデマンド	専任教員 非常勤講師	第3回FD研究会 学生アンケートから見るGoogle Classroomの使い方 【前編】【後編】【番外編※】	87

学部・学科研修

日程	時間	場所	対象	テーマ	参加者数
2021年10月6日(水)	—	オンライン	仏教学部	科目ナンバリングの作成について	11
2022年2月24日(木)	16:00～17:00	オンライン	文学部	佛科大学文学部の入試状況について	22
2022年1月19日(水)	—	オンライン	歴史学部	教育的配慮の必要性—対応に戸惑う学生への支援—	19
2022年3月10日(木)	15:40～16:50	オンライン	教育学部	新入生の学生像の傾向把握と今後の授業改善	33
2022年3月10日(木)	16:40～17:30	オンライン	社会学部	社会学部における初年次教育の現状と課題について	21
2022年1月12日(水)	16:30～18:00	オンライン	社会福祉学部	社会福祉学部における初年次教育の課題と今後の取り組みについて	19
2021年12月22日(水)	14:40～16:10	N1-209	保健医療技術学部	クリニカルクラークシップ導入における関係施設との連携と実際	22

その他研修

日程	時間	場所	対象	テーマ	参加者数
2021年6月30日(木) ※オンデマンドは、 2021年7月6日(火) ～2021年8月6日(金)	16:30～18:00	Zoom(同時双方向)・ オンデマンド	専任教員 専任職員	佛科大学教員職員合同研修 【シリーズⅠ】コロナ禍のなかの学生生活 —学生生活・遠隔授業・学生支援—	207
2021年9月29日(水) ※オンデマンドは、 2021年10月11日(月) ～2021年11月5日(金)	16:30～18:00	Zoom(同時双方向)・ オンデマンド	専任教員 専任職員	佛科大学教員職員合同研修 【シリーズⅡ】学生支援の新たな地平を探る —学生の声をもとに—	160

第1回FD研究会 「遠隔授業の授業設計～4つの事例から今学期の遠隔授業を考える～」

実施方法：Zoom・オンデマンド動画配信

日程：同時双方向 2021年4月28日（水）16：10～18：00

オンデマンド 2021年5月13日（木）～6月11日（金）

講師：岡崎 祐司（教育推進機構長）

メドロック 皆尾 麻弥（文学部英米学科 准教授）

市川 定敬（仏教学部仏教学科 准教授）

小池 桂（社会福祉学部社会福祉学科 教授）

相馬 伸一（教育学部教育学科 教授）

受講者数や授業方法の異なるタイプの遠隔授業について、4名の教員に事例発表をしていただいた。

◆事例発表

音声付きパワーポイント教材による遠隔授業

メドロック皆尾 麻弥 准教授 「ことばと文学」

この授業は全学共通科目で受講者数は44名、シラバスに記されている到達目標は、以下の4点となっている。

- ① Edgar Allan Poe の詩の特徴を理解する
- ② 英詩を音に注目しながら読むことができる
- ③ 英詩の韻律の規則について説明ができる
- ④ 英詩の一部を暗唱することができる

対面授業であれば、学生に Edgar Allan Poe の詩の特徴を伝えることは容易であり、韻律の規則について説明を行い理解させることは可能であったが、今回、オンデマンドの授業となったため、試行錯誤の末、次のような方法で授業を行った。

まず、Edgar Allan Poe の詩を朗読した音声ファイルを PowerPoint（以下 PPT）へ埋め込み、それを聞かせたのち、詳しい説明を行うこととした。また、それだけでは、学生に知識を定着させることが難しいことから、一方的に進めるのではなく、その PPT の所々に課題を設定することで、学生自身に考えてもらうように構成した。動画教材にしなかった理由については、授業内容の性質上動画にする必要がなかったことと、文字と音声に注目してもらいたかったからで、それには音声付き PPT が最適だと考えた。また、オンデマンド型授業の最大の弱点である「学生とのコミュニケーション」を補うため、授業では毎回感想を提

出してもらい、それに対して必ずフィードバックするようにした。

コメントのフィードバックは大変な作業であったが、一人一人がどれくらい内容を理解し、どのように詩を楽しんでいるかがつぶさに分かり、また、学生を取りこぼさず指導することができた実感があるし、学生自身もそのフィードバックを喜んでくれていたと、感想を述べられていた。

15週を終えてみて、オンデマンド型授業であっても学生の満足度を得られた理由として、90%くらいは、扱った素材（Poeの詩）が魔術的な魅力を持った一流の芸術作品であったこと、そして、残りの10%は教員自身が授業を楽しんでいたことと、ラジオ番組を楽しんでもらうような気持ちで、教員である私自身が盛り上がりながら話していたことだと思っていると述べられていた。

また、Macのキーノートを使用することで、PPTの見た目（デザイン）を良くし、視覚的にも学生が楽しめるよう工夫されていた。

今回の遠隔授業で良かった点は、学生が好きな時間に繰り返し視聴できたことであり、苦労した点は、コンピューター作業が多く、負担が大きかったことであった。

また、中には音声の再生がうまくいかない学生がおり、最後までうまくケアできなかったことが反省点ではあるが、全体としては良かった点が勝っており、対面授業以上のものを提供することができたと思っている、との報告をいただいた。

メドロック皆尾麻弥先生の取り組みを伺い、遠隔授業が難しいと言われている語学系の授業であっても、その創意工夫によって学生のモチベーションを引き出すことができ、反復学習ができるというオンデマンド型授業の最大の利点を利用し、学生に深く学ばせることを可能としたことに感銘を受けた。また、顔が見えない遠隔授業の場合、教員の声の抑揚が授業イメージとなることから、メドロック皆尾麻弥先生のように、先生ご自身が遠隔授業を楽しむことが大切だと感じた。

大人数講義での遠隔授業

市川 定敬 准教授 「ブッダと法然」・「宗教学概論」

「ブッダと法然」は1年生の必修授業で、登録者数が153名である。PPTは用意せず毎回テキストの当該授業日の学習範囲を提示し、それに対する課題を出した。学生はテキストの指定された部分を読み、印象に残った点、理解できなかった点を提出、それを授業の出席として扱った。

授業は、前週に学生から提出された課題の中で、先生が目に付いたところに対して、コメントするという流れで開始。その際に例えばコピー&ペースト（以下コピペ）については初期の段階で何度か指摘したところ、後半では学生は出典を明記するようになり、コピペがだいぶ少なくなった。遠隔授業であっても双方向型にするために、学生から寄せられた全ての

質問に回答した。この方法は、受講者全員の言葉を拾えるという点では良いが、回答に膨大な時間がかかることが（毎回回答が10数ページになった）弱点であると述べられた。

「宗教学概論」は登録者数が254名。この科目もPPTは用意せず、テキストの範囲を提示し、課題を提出してもらおう形で進めた。本学の通信教育課程で使用しているテキストを使用したので、各章ごとにあらかじめ課題が設定されており、その中から授業にふさわしい課題を選んで使用した。毎回提出された課題と、全体を踏まえたうえでの期末試験によって成績を付けた。対面で授業をしていた時よりも確実に学生が教科書を読んでいることが分かったが、受講生に上級生が含まれるためか、1年生を対象とした授業ほどは学生から質問が寄せられず、うまくコミュニケーションをとることができないと感じられた。弱点としては、提出された課題を毎回読むことが大変であったことと、課題について締め切り後の提出も認めていたため、課題に対する模範回答を掲出することができなかった（提出前の学生には回答となってしまうため）ことと述べられた。

市川先生の発表から受講生の多い授業での、効果的かつ効率的なフィードバックの方法について引き続き検討し、いい方法はどんどん共有すべきだと感じた。また、学生たちの理解度を測るためには、学年などの受講者層を踏まえてコミュニケーションの方法を考えることも大切であることがわかった。

講義資料と授業動画を使った授業

小池 桂 教授 「社会福祉史」

「社会福祉史」は登録者数が130～140名程。到達目標は「社会福祉の展開を通史的に捉えると同時に、個々の事象をその中に位置づけることができる」とした。授業ではテキストは使わず、レジュメと動画をアップして行った。実際の授業の1週間前にレジュメをアップし、予習してもらおうようにした。学生の評価は様々で、基本的知識がない状態で授業に臨むため、理解が難しいという学生もいれば、対面と変わらないくらいの授業を受けたられたと感じたという意見もあった。

動画の視聴だけでは理解が深まらないと考え、レジュメ作りは構成を工夫した。分量はA3サイズで1～1.5枚程度になるよう内容はできるだけ絞った。3つ程度の学びの柱を載せ、柱とは別にキーワードを3～4つ設定し、それを基に事前に予習するような作りにした。そのうえで、動画では冒頭でキーワードについて簡単な解説をした。授業のアウトラインを頭の中に描いてもらうためだ。ここまでで動画は7～8分程度。そのあとに本題に入り、1つの柱につき20～25分程度話すと、大体85分くらいとなる。最後に今日の授業で学んだことを5分程度で記入させた。この記入時間について見ているほうは空白のような時間となるため、おかしいという意見もあったが、それでも記入時間を設けた。

最後は、今の授業と翌週の授業のつながりを理解してもらうため、翌週の授業の概略を説

明して終了。授業ではラジオ講座のように学生が聴講していることをイメージし、大切なことは繰り返し説明する、聞きやすいようはつきりを話をする、学生に考える時間を与えるとといったことを心がけた。通常行ってきたことを丁寧に行っているような感じである。難点としては学生の顔が見えないことで反応が分からず、講義が一本調子になりがちだったと話された。対面授業であれば学生の反応もわかり、学生が授業中に書いたものを発表したりもできるので、やはり授業は対面の方がすぐれていると感じたと締めくくられた。

授業目標達成に向けた、工夫されたオンデマンド型授業

相馬 伸一 教授 「教育原論」

相馬先生はライブでの出席がかなわず、事前に作成された動画での発表となった。

「教育原論」は教育学部生の必修クラス（登録者数 200 名前後）と、教職課程をとる教育学部生以外の学生が対象のクラス（登録者数 30～70 名）があり、年間合わせて 2 ないし 3 クラスを担当している。教職への志望が明確な学生は熱心に受講していると感じられるが、義務感で受講している態度の学生も一部には見受けられる。

2017 年に教職課程カリキュラムができ、授業でどのような内容を扱うか細かく規定されるようになった。重要なことは単位の実質化であるので、カリキュラム開始時に授業の位置付けも再検討した。教職課程のカリキュラムは実学主義的になる傾向があり、教養が低く見られがちで、その流れに教員も対応しきれていない部分もある。相馬先生の研究対象であるコメニウスが推奨する「簡明に、愉快地に、着実に」を大切に授業を進めるようにしたと話された。学習内容が実践場面でのどのような意味を持つかを考えられるようなコンテンツ（動画）を活用し、着実に知識を積み上げるという目的で、毎回授業内に 2 回の振り返りテストを実施した。そのほか、教科書のコンテンツに対応した PDF 資料、講義動画、予習・復習の課題をアップした。動画については長くなりすぎないように簡潔な説明を心がけながらも、単調にならないように背景を工夫するなどされたそうだ。評価は対面授業で行っていた振り返りテストに代えてレポートとした。

授業のライブ感の欠如への対応として、自己紹介動画のアップ、質問には可能な限り早く対応し、教員への限定公開の質問であっても、回答をなるべく受講生全員に共有するように努めた。例えば第 3 回「教育の定義と教育学の役割」の授業では、なぜ教育学を改まって勉強しなければならないかということ、18 世紀の教育学者ヘルバルトが残した「技術への準備は学問によって行われる」という言葉を理解してもらうため、「自分のクラスの生徒がスーパーで万引きしてつかまった」という設定の教員採用試験の面接の映像で見せた。このような状況に対して事前に準備しておくことの重要性を感じるように問題提起することで、ヘルバルトの発言の真意について理解が促進できたと思っている。

今回の授業アンケートの結果は、前年度（対面授業）とほぼ変わりはない。授業アン

ケートの信ぴょう性に疑問もあるが、今年の学生は孤立した環境で、周りに流されず主体的な授業評価になっているかもしれないと考えている。遠隔授業の課題として、「ながら勉強」も可能となり本当に集中して学習に取り組んでいるのかわからないこと、何でも参照可能になってしまうため、知識の定着を測るテストができないなどを挙げられた。ただ、少し孤立した環境で勉強することが、学習の促進につながるということで、遠隔授業への可能性も感じたと話された。

◆報告に対する質疑応答

文学部英米学科 松本 真治教授より以下の質問がよせられた。

「昨年の学内の研修で学修時間についての話があり、2単位であれば原則として90時間と強調していました。オンデマンド型の授業の場合、どれくらいの学習時間を想定して授業をしていたか？」

小池：私は1コマあたり（授業時間以外に）30分程度の予習を想定した。

市川：気になるところがあればよく考えてほしいし、そうでないところは短くてもいいと考えている。授業については学生が提出するまでの時間なども含めて90分程度と想定はしていたが、予習・復習のところで具体的な時間は想定していなかった。

メドロック皆尾：30～40分くらいを想定しているが、分からない部分は繰り返し聞き、課題もあるので、実際は1週間に90～100分程度になると思う。

松本：本来2単位科目であれば週に4～5時間くらい勉強する想定となる。授業が遠隔となったことで特にそのことが声高に言われていますが、現実的に難しい。実際その時間に相当する課題を出すと学生から不評となります。その話を聞いて少し安心した。

岡崎：単位は時間であり、ある程度守ることは必要であるが、過重な負担をかけて学生を疲弊させるのではなく、学習効果のある授業や課題が大切であると思う。学生が何科目くらい履修登録をして勉強しているか個別には把握できないので難しい。オンラインになってからの学習効果はまた議論すればいいのではないか。

◆意見交換

本日の研修会の開催にあたり、事前に提出された遠隔授業に関する困りごとや、当日の発表内容を基に意見交換をした。

岡崎：私からは「ディスカッションを促進する工夫、特に1年生」についてです。学生には討論、ディスカッションのイメージやモデルがほとんどなく、ディスカッションをしても不安に感じています。ですので、私は始める前に、学生にディスカッションのルールや原則を明示するようにしています。例えば、間違ったこと、ピントが外れたこ

とを言っても良い、他者の意見を否定しないなどです。ある授業回では、ウォームアップ→本題→ポイント確認という流れでディスカッションをしました。議論の「活性化」のイメージを具体化する、また、討論をほめるようにも心がけています。段階を踏んで工夫していくことが大切だと思います。

それぞれの先生方に遠隔授業の工夫や苦勞についてお聞きしていきたいと思います。市川先生は、授業1回あたりコメントの返信にどれくらいの時間をかけましたか。

市川：1日半から2日くらいかかりました。

岡崎：学生のコメントを見て、課題の内容を段階的に難しくしたりはしましたか。

市川：そういったことはせずテキスト通りに進めたが、課題を出す際に学生からの質問の内容を踏まえてコメントを提示したりはしました。

岡崎：評価はどうしましたか。

市川：「宗教学概論」の場合は14回の課題（70点）と、残り30点分として、普段の3倍くらいの文字量の課題を提出させました。

岡崎：小池先生、ラジオの感覚とおっしゃってましたが、遠隔授業の場合は「聞く」方が学習効果があるように思いましたが、オンデマンドでも授業をしたことはありますか。

小池：オンデマンドで90分していました。90分まるまる話していたのではなく、間を入れたりして90分です。

岡崎：メドロック先生、お話を聞いて授業を受けてみたいくなりました。授業のスライドなどでもおしゃれな感じを出すことは大事なんですね。

メドロック皆尾：そのように思っていました。

第3回 FD 研究会「学生アンケートから見る Google Classroom の使い方」【前編】

実施方法：オンデマンド動画配信

実施期間：2022年3月29日（火）～5月31日（火）

講師：岡崎 祐司（教育推進機構長）

齊藤 利彦（学生支援機構長）

学生を対象とした各種アンケートの結果報告、およびアンケート結果報告をふまえてのディスカッションを実施した。

◆報告1

「2021（令和3）年度コロナ禍における学習実態調査」

発表者：岡崎 祐司（教育推進機構長）

2021(令和3)年度コロナ禍における学習実態調査の結果報告をいただいた。この調査は、2021年度学生はどのようなデバイスで遠隔授業を受講していたのか、受講していた時間帯や遠隔授業に対するの評価を知るために学生支援部と教育推進部の共同で調査を実施した。

〔調査概要〕

実施期間：2022年1月13日～2月10日

対象：1・2年生 2,842名

回答者数：800名（回答率 28.1%）

各学科の回答率はどの学科も30%前後。20%を切る学科は、遠隔授業が少なかったと思われる。

・受講していた場所〔スライド4〕

受講していた場所について、アンケートをとった結果、5割の学生が自宅で遠隔授業を受講していた。続いて実家の共用スペース、下宿という結果になり、大学の教室で受講していた学生は5.5%、サンサーラなどの学内の共有スペースでは6.0%、合わせて10%程であり、予想していたよりも少ない印象であった。

・使用したデバイス〔スライド5〕

スマートフォンで受講している学生が多いと予想していたが、大半の学生は自分のPCで受講していることがわかった。またタブレットよりもPC受講の方が多かった。大学生として、授業の受講・就職活動においてPCが必要であり、自分のPCを持っている学生が多いのかもしれない。

・オンデマンド受講の場合、動画をみて課題に取り組んだか〔スライド6〕

オンデマンドの教材を実際にみて、課題に取り組んだかを聞いた。①必ず動画を視聴し課

題に取り組んだ 52.0% ②必要と思われる授業回の動画を視聴し課題に取り組んだ 32.1% ③動画の中で、必要と思う部分だけ視聴し課題に取り組んだ 13.0%という結果になり、80%の学生は動画を視聴していることがわかった。学生がオンデマンド動画を視聴し、課題に取り組む方法を確立していく必要がある。

・オンデマンド型授業の受講時間帯〔スライド7〕

実際学生がどの時間帯にオンデマンド動画を視聴しているかという問いでは、授業と同じ時間帯はごく少数であった。それ以外の④時間割と違う時間帯（19：00～23：59）と⑤24時以降の夜型の学生が合わせて60%程度と半数以上が夜に受講していることが分かった。時間割と同じ日に受講しているかも聞いたほうが良かった。

・オンデマンド型授業の到達目標達成感〔スライド8〕

オンデマンド型授業では、学生が達成感を持っていないのではないかと予想していた。シラバスに記載されている到達目標を達成できているかという問いに対して、①達成しているが22.4%、②やや達成しているが47.5%と、「達成している」と回答している学生が、予想より高い結果であった。この調査に回答している30%（回答率）の学生はおそらくまじめに授業を受講している学生であると考えられるので、達成しているとの回答が多くなったと思われる。この調査に回答しなかった7割の学生がどのように考えているかはつかみきれない。

・オンデマンド型授業の評価〔スライド9〕

自由記述式の設問とし、学習効果が高かった授業と学習効果が低かった授業の授業名とその理由を学生に記入してもらった。学習効果が高かったという設問に対しては多くの学生が回答（159名）し、授業で得たこと等を記入してくれた。一方、学習効果が低いと回答された授業の多くは、レジュメのみ掲出されている授業であり、学習した実感をもてないのであった。授業は、音声や動画で学生に語り掛け、それにリンクした課題を課し、学生が課題を提出し、その課題に対して反応するという流れが基本的なサイクルである。オンデマンド型授業であっても対面授業であっても同じであり、資料の掲出のみでは授業とはならない。

・遠隔授業の評価〔スライド10〕

遠隔授業で困ったこと、遠隔授業のメリット・デメリットを自由記述式で学生に回答してもらった。遠隔授業で困ったことの一部の回答を投影しながら、回答をご紹介いただいた。メリットについては、「登校する必要がない」「音声がはっきり聞こえる」「授業に余裕をもって参加できる」等が挙げられた。従来であれば下宿が必要な遠方に住んでいる学生が、1時半以上をかけて登校する学生が増えている。そのため、朝余裕をもって受講できたというような回答に繋がったのかもしれない。

デメリットについては、「先生の顔が分からず授業が終わる」「人との交流がない」「目が疲れる」「コピーの自己負担が大きい」「集中力が続かない」等が挙げられた。今回の調査は、数値のみならず、学習効果が高かった授業や遠隔授業で困っていること・メリット・デメリットを学生自身に入力してもらったので、これらの回答をより深く読み込み、分析し、学習支援等で活用していくことが必要である。

・オンデマンドでいちばん効果が期待できる授業〔スライド 11〕

学生自身がオンデマンド型授業において、いちばん効果が期待できるのは何かを聞いた。大人数の講義＝レクチャーは、オンデマンドの方が良いと考える学生が多かった。

・同時双方向でいちばん効果が期待できる授業〔スライド 12〕

同時双方向（リアルタイム）で、いちばん効果が期待できる授業形態について、オンデマンドでは「大人数講義（100名以上）」と回答した学生が多かったが、同時双方向ではやや授業規模が小さいものの回答が増えた。しかし、学生の中でもコロナウイルスの感染が広がっているというイメージで回答している学生と、コロナウイルスが終息した後の遠隔授業をイメージしている学生がいる。

・コロナ感染症が終息、落ち着いた場合、引き続き遠隔授業を受講したいか〔スライド 13〕

この設問については、遠隔授業に対して否定的な学生は10%強であり、遠隔授業を取り入れても良いと考えている学生は70%を超えた。この数値をどのように見るかだが、教育効果という点で遠隔授業が学びやすいという側面もあるし、また学生が置かれている経済状況が影響している可能性もある。現在の高等教育政策は、学生に普遍的に高等教育を保証する・各大学の学費を下げるために私学助成を手厚くしていく・奨学金等を増やしていくような流れにはなっていない。競争主義的な補助金の出し方にもなっており、政策誘導がはっきりした補助金の出し方になっている。これからの遠隔授業のあり方は、大学運営そのものにも関わってくる。コロナが落ち着いた場合も、遠隔授業で学習効果があったとすると、遠隔授業は定着していく。これからは、対面授業・遠隔授業ともに授業内容を充実させていくことが教員に求められている。

◆報告 2

「学生生活実態調査 2021」にみる遠隔授業への意識

発表者：齊藤 利彦（学生支援機構長）

「学生生活実態調査 2021」について報告をいただいた。この調査は、学生生活の実態を調査するもので、設問は多岐にわたる。今回は遠隔授業の項目にフォーカスした速報的な報告となった。

〔調査概要〕

実施期間：2021年10月4日～10月31日

対象：学部・大学院生 5,963名

回答者数：2,595名（回答数 44%）

・報告書にみる学生の遠隔授業への意識〔スライド3〕

コロナが収束を見せない中、遠隔授業も3年目を迎えている。2020年度は、遠隔授業は対面授業の代替という位置づけであったが、2021年度からは遠隔授業は授業そのものであると全国的に指摘され始め、新しい授業スタイルとして定着し始めている。学生も遠隔授業のメリット・デメリットを把握しており、学生生活実態調査の定性調査（自由記述）では、学生から厳しい意見が寄せられており、大学に対して、教員の授業に対して、様々な意識を持っている。中には、遠隔授業そのものに対する意見と、各教員が作成する授業コンテンツ（オンデマンド）に差があるといった意見もある。

これらのことから、今の学生はオンデマンド動画や音声資料の質の良し悪しがわかるようになってきていると述べられた。これは全国的な傾向であり、各大学の実態調査等でもあげられている。また、学生実態調査の遠隔授業に対する要望や意見の自由記述の回答には、「学費」とリンクするものが多く、学費の返還や減免等にリンクする傾向が強まっていると述べられた。

・遠隔授業を通じた学生の意識変化と向上の傾向〔スライド4〕

続いて、学生の意識が大きく変わってきている点について報告された。

「大学生活を通して身についたと実感している力」の設問では、2021年度の調査で初めて「パソコンやインターネットを使いこなす力」が第1位となった。これは、遠隔授業においてパソコン使用頻度が増えたことが大きな要因であると考えられる。また「PCを所有していますか」という設問では、多くの学生が個人所有のパソコン等のデバイスをもっていることが分かった。

また、「大学生活を通して身につけたい力は何ですか」という設問では、「パソコンやインターネットを使いこなす力」は第4位であった。第1位～第3位は、毎回同じでコアとなる項目であるが、「パソコンやインターネットを使いこなす力」は前回と比較すると2.8ポイント上昇している。これは学生の意識の変化であり、遠隔授業を通して、このスキルを得たと実感し、さらにパソコンスキルを得たいと考えている。そういった思いを学生はもって、教員の作成する動画コンテンツ等を視聴しており、その点をふまえて教員は動画作成に取り組む必要があるのではないかと斉藤先生は述べられた。

・Q.佛教大学の施設や学生支援に関する期待や要望は何ですか〔スライド5〕

「授業料を安くしてほしい」が60.5%と、前回より8.2ポイント上昇した。過去4回の調査でこの回答は第1位であったが、回答割合は微減傾向であった。しかし、2021年度の調

査では大幅な増加となり、コロナ禍の影響や遠隔授業に対しての学生の要望などが要因であると考えられる。特に学費の要望は低学年で多い傾向にある。授業料について安くしてほしい具体的な理由は、定性調査からみることができると考えている。

・定性調査「大学への意見・要望」にみる遠隔授業への意識〔スライド6〕

調査の第8章は、自由記述欄となっている。「特になし」を含め、601件の回答があったが、回答の7割は授業関係の要望や意見であった。対面授業を期待していたが遠隔授業になってしまったという不満や、遠隔授業であることを理由に、学費への声などが挙げられている。また、それぞれの遠隔授業のレベルについて不満を持ち、学費返還を要望する意見も多く寄せられた。授業科目によっては、その質に満足できないという学生の声が多いことを教員側は受け止めておく必要があると述べられた。そのためにFD研究会を教育推進機構を中心に恒常的に行い、教員側のアップデート、教育コンテンツの質を向上させていかなければならないと話された。今の学生は、他大学の友人との会話やSNSを通じて、他大学の授業状況をよく知っている。比較されることもあるため、我々佛教大学の教員も教育コンテンツの向上を意識しなければならないのではないだろうか。

・Q.今、不安や悩みがあるとすれば、それは何ですか？〔スライド8〕

学生が不安に思っていることは「進路（就職・進学）」が57.5%と第1位であった。しかし学科によっては、この回答が7割を超える学科も存在する。そのような学科は、ぜひ進路就職課とキャリア教育について考え、実施していただきたいとお話された。

第2位は、「学業」48.9%であり、特に低学年からの回答が多かった。これについては、自由記述にも学業についての不安を記入している回答もあり、その件数は154件であった。コロナ禍において、多くの学生が学業に不安を感じているため、教員はGoogle Classroomを活用し、丁寧な情報発信や学修の進め方の指導をする必要性があると述べられた。

・Q.授業について希望することは何ですか〔スライド9〕

第1位「レジュメを配布してほしい」、第2位「学生の理解度を把握しながら授業を進めてほしい」の2つが前回より上昇している。先に岡崎先生から報告のあった「2021年度学習実態調査」でも「オンデマンド型授業で学習効果の高いコンテンツは何ですか」との問いに「1位 レジュメや資料」と「3位 質問できる機会」があげられており、この結果とも関連が深い。Zoom等で画面共有した資料は、全てGoogle Classroomにもあげてほしいという学生の意見がある。多くの先生方は、資料等を掲出いただいていると思うが、学生は資料やレジュメが掲出されているかどうかをよく見ているため、先生方には理解していただきたい。

・オンデマンド型授業における学生理解度へのアセスメント〔スライド10〕

このスライドでは、全国的な調査や指摘についてまとめた。従来オンデマンド型授業では

形態的にも構造的にも学生の理解を確認しながら、学生のペースに合わせることや質問に回答することは難しいとされてきた。2021年度に入ってから、大きく考え方に修正が入ってきている。オンデマンド型授業は、配信された動画・録音教材を閲覧することで学びを深める「学習」のパートと、学習した内容が正しく理解できているかを確認する「評価」のパートの2つから構成されるべきであるという考え方がトレンドとなっている。「評価」のパートについては、LMSを活用することで学生の理解度を確認しつつ、質問に応答することも可能である。例えば、Google Classroomでトピックを作成し、その中に「質問」タブを作成すれば、学生の質問に回答できる。Google フォームを活用すれば、小テストなどで簡単に学生の理解度を測ることができる。すでにプラットフォームが存在するため、これを活用することで「評価」のパートを充実させることができる。多くの先生が活用いただいているが、底上げしていく必要性を感じていると述べられた。もう一点、近年話題となっているのは、1人1人に質問の回答をするのではなく、まとめて回答した動画をアップすることも一つの手段である。また、オフ会としてオンラインで交流の場を設けることも一つの手段で、全国的に実施している大学も増えてきている。その場合は、15回の授業の中で上手く活用する必要がある。オフ会については、対人関係の不安を解消していくために、低学年が履修する科目内で行うのが良いのではないだろうかと言われた。

・学生の「充実度」を高めるために〔スライド 11〕

学生生活実態調査では、「充実度」「非充実度」も聞いている。2021年度は「充実度」が52.9P・前回比15.6P低下し、「非充実度」は16.1Pと前年比10.1P上昇した。全国の結果と比較すると、本学は毎回「充実度」が10Pほど低いが、今回さらに低い結果となった。2020年度よりは上昇しているであろうと考えているが、このような数値の結果となった。それでは充実度をあげるにはどうすればよいのだろうか。まず教員にできることは、教育内容の充実であり、この点は充実度に直結してくると考えられる。授業の満足度が、充実度に繋がるであろう。教育コンテンツをより良い形にしていくこと。これは安易ではないが、それを意識することもFDとして大切なことであろうと言われた。

・おわりに〔スライド 12〕

学生の「充実度」を高めていくためには、授業への満足度を高めることが重要であると考えられる。また遠隔授業においては、質を上げる方法を検討し、学内で共有していくことも大切であると述べられた。

動画や音声コンテンツを充実させるとともに、LMS (Google Classroom) を活用した学生との関わりを深めていくことも重要である。

最後に、学生支援の新たな個別領域に「遠隔授業への対応や支援」があげられてきている。これは担当課だけでは対応が不可能なため、教員や学部学科との密な連携が不可欠であると言われている。今後も、学部学科と連携し学生支援にあたっていきたいと最後に述べられ

た。

◆ディスカッション

齊藤学生支援機構長と岡崎教育推進機構長が「2021（令和3）年度コロナ禍における学習実態調査」の自由記述回答を基に、ディスカッションを行った。

Q17. 遠隔授業で困ったことがあれば教えてください。

- ・先生が本来の授業時間よりも1日以上遅れて動画を掲載する科目があった
- ・ついサボってしまう
- ・課題をため込んでしまう
- ・自分が何を勉強しているのか、何を理解しているのかわからない
- ・勉強へのモチベーションや意欲があげられない
- ・先生とのかかわりがもてない
- ・対面とリアルタイムの遠隔授業が同じ日にあるとバスや電車の中で受けざるを得ないのでしんどい

など

齊藤：本学は真面目な性格の学生が多く、スケジュール通りに授業を受講したいと考えているのではないかと。そのため教員がコンテンツを授業日に掲出していないと、不安やモチベーションの低下につながる。Google Classroomのストリーム等を活用し、「動画の掲出が遅れます」等伝えることで、学生は落ち着くと思う。しかし、メッセージをあげすぎると、どの内容が重要かわかりにくくなるため、【最重要】【重要】を付けるなど標記を工夫し、メリハリをつけることも大切。

「サボってしまう」や「課題をため込んでしまう」について、個人的にはレポート形式の課題を課すことは学生の文章力の向上につながっていると思う。しかし、レポート形式だけでなく、Google フォームを活用したクイズ形式の小テストなども組み合わせることで授業を運営していくのもひとつの手段ではないだろうか。

岡崎：教員が、遠隔授業のルールを始めに細かく決めている授業がある。ルールを決めることで、学生は「ルールを守らなくてはならない」と意識し、コンスタントに学習を進めることができているのではないかと。

Q18. 遠隔授業のメリットを教えてください。

この設問では、231件の回答が集まった。こちらも同様、気になった自由記述をみていく。

- ・登校する必要がない
- ・朝早く起きる必要がなく、心に余裕をもって授業に参加することができる
- ・次の日何を着ていこうと考える必要がない

- ・授業動画の巻き戻しや速度調節が可能のため、聞き逃したところや分かりにくいところを繰り返し視聴できる
- ・時間にしばられない

など

岡崎：学生の通学時間は1～2時間と長くなっており、コロナ禍で経済的に厳しく、大学に来る交通費が負担になっているという現実がある。

斉藤：学生生活実態調査の結果からも通学時間が伸びてきていることが分かる。1時間半から2時間以上がコア層になってきている。公共交通機関に長時間乗ることはコロナウイルスの感染のリスクがあり、学生たちも不安に感じている。また定期代も相当かかっているという意識も学生は持っている。

岡崎：コストへの関心が高まっており、遠隔授業があると毎日大学に来なくてもいいことを学生はメリットに感じている。

またその他に「授業動画の巻き戻しや速度調節が可能のため、聞き逃したところや分かりにくいところを繰り返し視聴できる」と回答がある。やはり何度もリピートできることがメリットと感じている。

斉藤：そうですね。何度も聞けることで学習が深まることをすごくメリットとして受け取っているみたいですね。発達特性のある学生にとっても自分のペースで、誰にもペースを崩されずに学習できることをメリットに感じているようだ。

岡崎：繰り返し学べる、確認できることは重要な点である。対面授業でも、音声だけでも録音し、Google Classroom にあげられれば、欠席者への対応が可能になる。

斉藤：個人的にこれからの対面授業はハイフレックス型の授業が良いのではないかと感じている。学生に出席の形態を選択してもらうのも一つの方法。授業の動画をアップすることで、対面で出席していた学生も復習もできる、オンデマンドで出席した学生も学習を深められるので、学生支援としては大切だと思う。

岡崎：Google Classroom は全授業で使用が可能であるため、上手く活用することで、学生は復習や確認が可能になり、また教員も授業で言いそびれたことを番外編というような形で掲出することができるのではないかな。

斉藤：番外編について、発展的な内容を掲出することで、授業内容をより深く学びたい学生は、満足度の向上に繋がるだろう。

Q19. 遠隔授業のデメリットを教えてください。

- ・先生の顔が分からないまま終わった科目もある
- ・人との交流が減る
- ・先生によって差が激しい
- ・専門的な科目に限って、先生が動画や同時双方向型をせず、レポート課題を設定しているだけという傾向がある
- ・質問しにくい

等

岡崎：Google Classroom に質問コーナーを設定して、「なんでも送ってください」といっても 1、2 件くらいしか質問が来ない。

齊藤：「質問と感想を送ってもらう形式で、なおかつ締切りを設定すると、多くの学生が送ってきた。その代わりそれに対してフィードバックをしないと、学生が不安になる。私は学生一人一人に返事をしていたが、動画像の中でまとめてお返事されている先生もいた。

岡崎：私もまとめて返事をしている。質問に対して返事があるかどうかは、学生にとっては大きい。

また、授業ではないが「友達が絶望的にできない」という回答もあった。特に現 2 年生は入学時からコロナ禍であったため、2 年間交流の場が持てていない。

齊藤：学生の実態調査等では、全国的にも 2020 年度に比べて 2021 年度は「友人ができた」の数値は少し持ち直してきている。しかし、対人関係において不安だと回答する学生が多く、特に低学年の層に集中している。オフィスアワー等、交流の場をオンラインでもいいので、作る必要があると思っている。

岡崎：授業単位でも良いが、学科ごと、実習の種別ごと等様々な単位で学生が交流できる機会があればよいのではないか。

また回答の中には、「スマホを触りながらや音楽を本を読みながらなど注意されることがないので授業態度が悪くなる」「一人で勉強するのが苦手」「同じ講義を受ける人との交流や、意見交換ができず、孤独を感じる」等もあった。対面授業ではひとつの教室で他の学生が発言しているのを見て、刺激を受けることもあるが遠隔授業ではそれができない。

齊藤：通信教育課程でも同じことが起こっている。通信の学生はスクーリングで大学に登校することでモチベーションを保っている場合もあり、グループワークで他学生と交流することを求めている学生もいる。今後、オンラインでのグループワークやアクティブラーニングについて学ぶことは、学生の孤独感を軽減することに繋がっていくのではないだろうか。

岡崎：その他に「自宅で資料を印刷するため、インクと紙を大量に消費する」という回答もあった。私も学生が資料の印刷に困ると思い、一昨年からはしていたが、毎回 10 枚くらいのパワーポイントを、そのままではなく 1 枚程度の A4 の Word 版に圧縮してアップロードしていた。また、資料は別途印刷し、大学内の共有スペースに置くことで、自由に学生が取れるようにした。遠隔と対面の両方の授業が開講されている状態なら、この方法で一定は解決できるのでは。

齊藤：学生実態調査でも同じ結果が出ているが、学生は遠隔授業のメリットを認めながらも、教員によって授業の差を感じていて、とても気にしている。特に、「学費を保護者に払ってもらっている」という学生の意識がここ数年で強くなっている。対面授業でも教員の差はあったが、その差が厳格に言われるようになってきている。

岡崎：対面でも教員によって授業の差はあったが、遠隔になって、より明確に言われるようになっていく。

齊藤：オンデマンドの授業だと、保護者の方も視聴していることがある。授業の可視化が進んで、保護者の方の厳しい目でみられていて、授業に対してご意見を頂戴したこともある。教員は今後さらにそういったことも意識していかなければならない。

岡崎：大学は、授業だけでなく、授業+（プラス）コミュニティなので、教員と学生ではなく、学生間、先輩と後輩など、コミュニティが活性化していたからこそ大学へ行きたいと思うだろうし、「キャンパスライフ」と言える。今後は、学生が主体的に自らコミュニティを作っていく支援が全学的に必要なようになってくる。学生同士が交流していないと、大学に元気が出ない。授業だけでなく、学生同士のコミュニティをどう作っていくか考えることがコロナ禍において必要だ。

Q22. 今後、コロナが終息もしくは感染が落ち着いた場合、引き続き遠隔授業を受講したいと思いますか。

岡崎：「①多くの授業で受講したい 35.9%」「②一部の授業で受講したい 42.5%」を合わせると70%以上。80%弱の学生は遠隔授業を引き続き受講したいと思っているが、一方で20%くらいの学生はあまり受講したくないと考えている。この数値をどう見るか。肯定的に回答している学生も必ずしも教育効果だけのことではなくて、交通費などの経済的な問題もあったり、良い遠隔授業を受講してこれならもっと受けたいと感じたりといろいろな背景があると思うので、これで遠隔授業に肯定的だと一概に単純化ができないと思う。

齊藤：学生にとって遠隔授業は新しい授業形態であるが、家でも学習が深められて成果が上がると知った。その結果、学生は未来志向的になってきているのではないだろうか。社会全体がオンラインを活用した社会に移行してきているので、学生のデジタルへの対応力は高いと考えられ、デジタルに可能性を感じている世代であると思う。一方、対面で教員や学生と交流したいという思いもあつつつ、将来的に人との交流が持てるのかと不安に感じている点もあり、この数値になっているのではないだろうか。

岡崎：質の高い遠隔授業があって、なおかつ対面でコミュニケーションができる場があることがこれからは必要であり、コロナが終息したとしても、遠隔授業がゼロになることは考えにくい。遠隔授業で学ぶ科目、対面で学ぶ科目など使い分けや切り分けが積極的に進んでいく。遠隔授業に適している科目、対面授業に適している科目の使い分けや方法の切り分けがさらに進んでいくと考えられる。これから大学は、新しいものを生み出していかなければならない。オンライン授業もある中での学生支援や学習支援、対面授業の充実、学生間のコミュニティをどう作るか、大学が対応しなければならない複数の課題が浮かび上がってきた調査であった。

2021(令和3)年度 コロナ禍における学習実態調査 の概要

YUJI OKAZAKI

1

調査概要

実施期間: 2022年1月13日～2月10日、
B-net
対象: 1・2年生 2842名
回答: 800名 (28.1%)

1年生 回答者505
(対象者1432)
2年生 回答者295
(対象者1410)

2

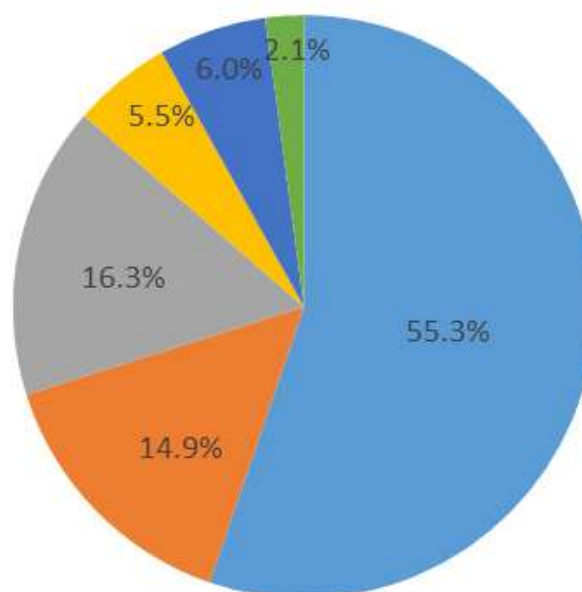
各学科の回答者の割合

仏教	30.4	臨床心理	17.6
日本文学	28.2	現代社会	20.7
中国	20.1	公共	25.8
英米	20.1	社会福祉	30.1
歴史	29.6	理学療法	39.8
歴史文化	29.7	作業療法	34.8
教育	29.0	看護	45.9

3

受講していた場所

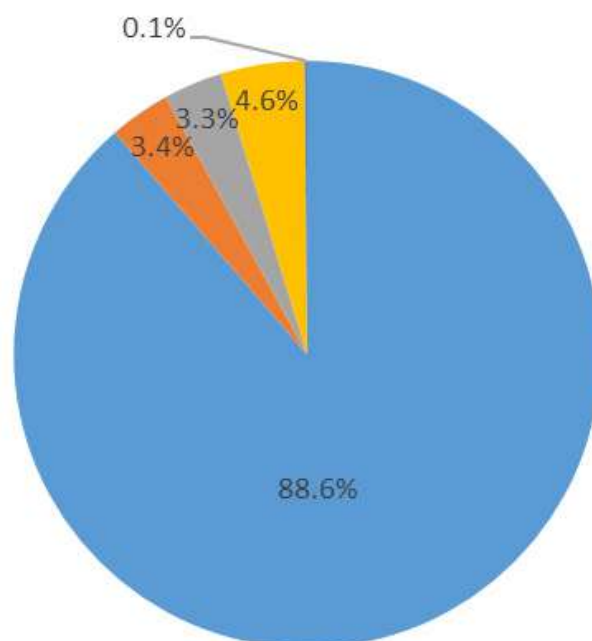
- ①実家の自分の部屋
- ②実家の共用スペース
(リビングなど)
- ③下宿
- ④大学の教室
- ⑤サンサーラや大学の食堂と
いった共用スペース
- ⑥その他の場所



4

使用したデバイス

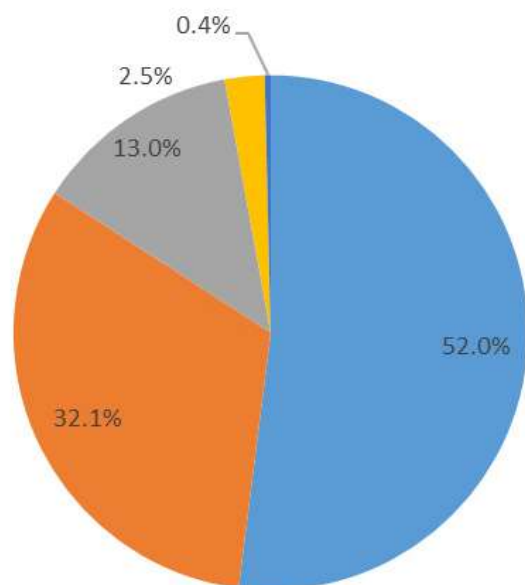
- ①自分のPC
- ②家族と共有しているPC
- ③タブレット
- ④スマートフォン
- ⑤その他



5

オンデマンド受講→動画を見て課題に取り組んだか

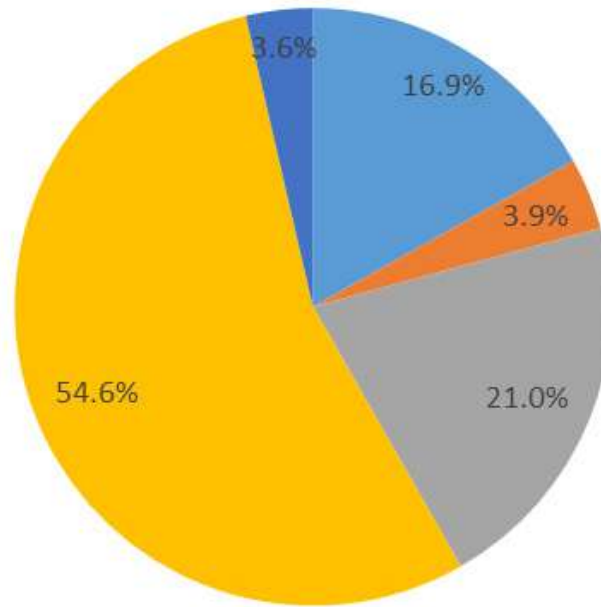
- ①必ず動画を視聴し課題に取り組んだ
- ②必要と思われる授業回の動画を視聴し課題に取り組んだ
- ③動画の中で、必要と思う部分だけ視聴し課題に取り組んだ
- ④動画を視聴せず、課題に取り組むことが多かった
- ⑤その他



6

オンデマンド授業の受講の時間帯

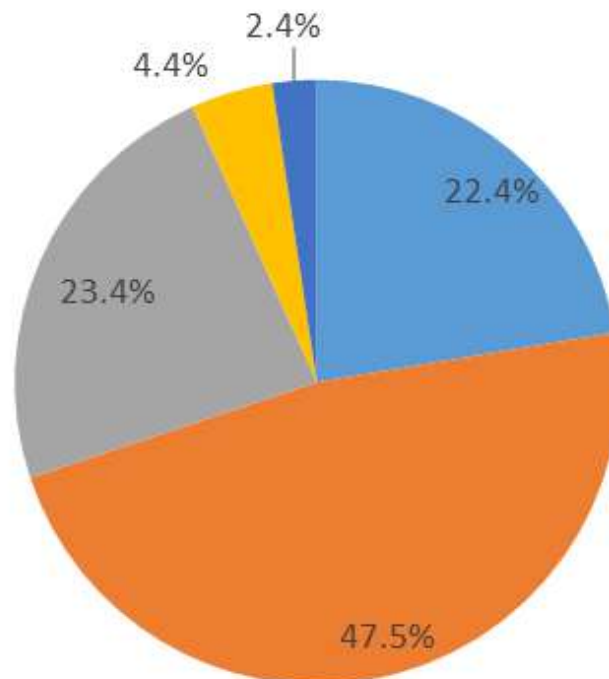
- ①時間割と同じ
- ②時間割と違う時間帯
(6:00~12:59)
- ③時間割と違う時間帯
(13:00~18:59)
- ④時間割と違う時間帯
(19:00~23:59)
- ⑤24時以降



7

- ①達成している
- ②やや達成している
- ③どちらとも言えない
- ④どちらかと言うとしていない
- ⑤していない

オンデマンド授業の到達目標達成感



8

オンデマンド授業の評価

Q15. オンデマンド型授業についてお伺いします。学習効果が高かった授業とその理由を教えてください。(159名回答)

Q16. オンデマンド型授業についてお伺いします。学習効果が低かった授業とその理由を教えてください。(87名回答)

9

遠隔授業の評価

Q17. 遠隔授業で困ったことがあれば教えてください。(131名回答)

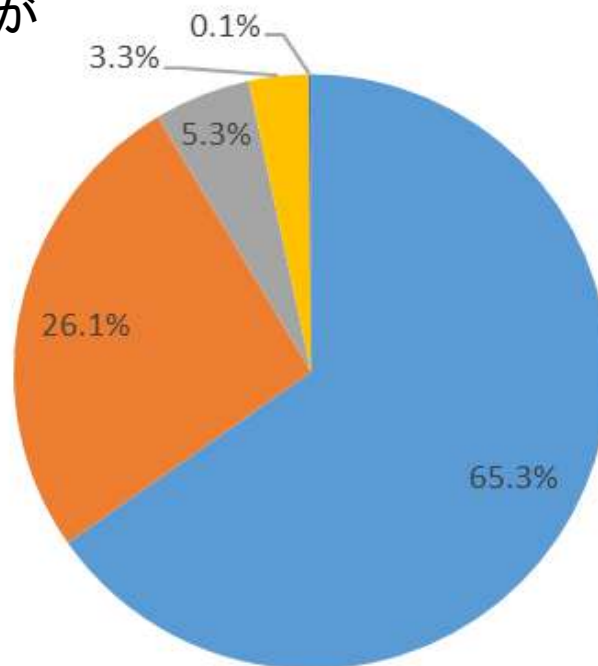
Q18. 遠隔授業のメリットを教えてください。(231名回答)

Q19. 遠隔授業のデメリットを教えてください。(215名回答)

10

オンデマンドでいちばん効果が期待できる授業

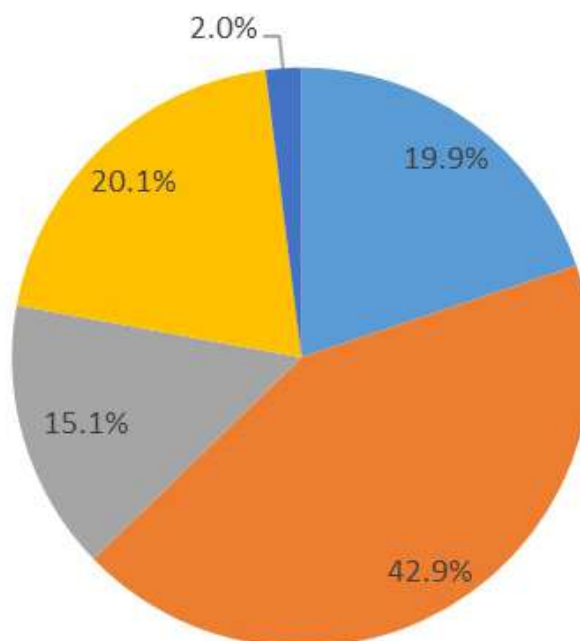
- ①大人数講義（100名以上）
- ②講義（100名未満）
- ③演習
- ④ゼミ
- ⑤実習



11

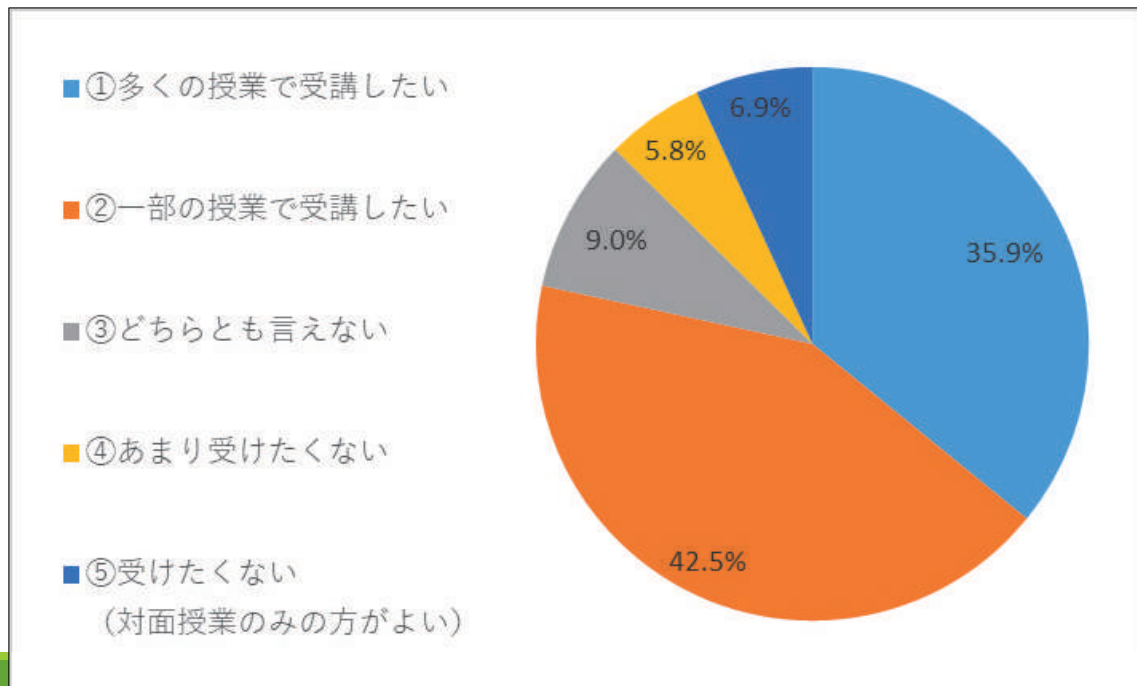
同時双方向でいちばん効果が期待できる授業

- ①大人数講義（100名以上）
- ②講義（100名未満）
| ■ ③演習 |
| ■ ④ゼミ |
| ■ ⑤実習 |



12

コロナ感染症が終息、落ち着いた場合、引き続き遠隔授業を受講したいか



13

第3回 FD 研究会

「学生アンケートから見る Google Classroom の使い方」

参考報告

『学生生活実態調査 2021』にみる 遠隔授業への意識



学生支援機構長
齊藤 利彦

はじめに

- 2021年10月、隔年調査の学生生活実態調査を実施
- 詳細な報告は、学生支援推進室が行う予定
- 本報告は第3回FD研究会の参考
- 当該調査を通して、本学学生の遠隔授業に対する意識を、速報的に報告する
- 調査方法：Webアンケート調査（ポータルサイト「B-net」を利用）
- 対象者：2021年10月時点の佛教大学在籍者（学部・大学院）5,963名
- 有効回答数2,595名（**回答率44%**）
- 調査時期：2021年10月4日～10月31日
- 設問数：45問

参考
歴代の当該調査回答率

2015年度調査	33.1%
2017年度調査	56.8%
2019年度調査	47.0%

報告書にみる学生の遠隔授業への意識

- ・コロナ禍が収束のきざしをみせないなか、遠隔授業も3年目にはいる
- ・全国的に、遠隔授業が対面授業の代替ではなく、“遠隔授業そのもの”として定着
- ・遠隔授業に対してはメリットを認めつつも、定性調査では、厳しい意見がよせられている

- ・実態調査をみると、大学に対し、授業に対し、**さまざまな意識をもつ学生たち**
- ・遠隔授業の形態そのもの、と同時に、オンデマンド動画の内容を問う学生たち

遠隔授業に対し、学生は**“質の良し悪しがわかるようになってきた”**といえる

自由記述欄に寄せられた遠隔授業に対する要望や意見は、**学費**とリンクすることが多い

学生の意識変化や向上がうかがえる調査結果もでてきているので、検討すべきだろう

3

遠隔授業を通じた学生の意識変化と向上の傾向

遠隔授業をとおして、**学生側の意識変化**がうかがえる

Q.「大学生活で身についたと実感できる力」

第1位「パソコンやインターネットを使いこなす力」34.5%（前回比9.6p↑）
前回調査では第2位
遠隔授業の進展により、使用頻度が高まったためか

参考 Q.「PCを所有していますか」
「家族と共有のPC」13.1% 「個人所有のデスクトップ型PC」8.9% 「個人所有のノート型PC」79.4% 「個人所有のタブレット型PC」7.1%
「所有していない」1.8%

遠隔授業をとおして、**学生側の意識向上**がうかがえる

Q.「大学生活で身につけたい力は何ですか」

第4位「パソコンやインターネットを使いこなす力」31.9%（前回比2.8p↑）
遠隔授業の進展により、そういった能力を求める傾向のあらわれ

学生の意識や関心の高まりをうかがうことができる

4

Q. 「佛教大学の施設や学生支援に関する期待や要望は何ですか」

第1位 「授業料を安くしてほしい」 60.5% (前回比8.2p↑)

第2位 「学生食堂を充実してほしい」 27.8% (前回比12.5p↓)

第3位 「キャンパス内の居場所を充実してほしい」 (前回比2.8p↓)

「授業料を安くしてほしい」が、期待・要望の6割を占める結果

- ・過去、4回の調査でも、第1位
- ・ただし、0.9p↓→4.2p↓→0.1p↓、と微減傾向にあった
- ・2021年度調査で8.2p↑に転じる

参考 Q. 「授業料を安くしてほしい」
入学後の年数別数値動向

1年目 59.6%
2年目 62.5%
3年目 62.2%
4年目 57.1%
5年目以上 66.7%

2年生・3年生がコア層を形成

・2年生・3年生の授業料に対する意識が
ほぼ同値で、全体値より、やや高い

増加理由は、コロナ禍や遠隔授業への思いなどが理由か

定性調査である自由記述欄から、その理由を、一定程度うかがうことができるのでは

5

「大学への意見・要望」にみる遠隔授業への意識

第8章は自由記述。項目ごとに整理して記載

「特になし」を含め、601件

回答者2597人に対する割合として、約23.1%

遠隔授業に関わる意見は以下のとおり

「単位認定・出欠・成績について」	15件
「授業について」	105件
「授業や行事関連の情報提供について」	49件
「学費について」	97件
「教員について」	30件
「学びに関する環境・設備について」	21件
「PCやネット環境について」	11件

計448件

自由記述欄の約7割を〈授業関係〉が占める

- ・遠隔授業の良さよりは、遠隔授業への不満が多く寄せられる傾向
- ・遠隔授業という形態、遠隔授業であることを理由として、**学費を問題視**する学生
- ・遠隔授業のレベルなどから、**学費返還や値下げを要望する声**も多い

定性調査では、
辛辣な意見が多い

授業科目によっては、その質が満足できない、という学生の声が多い傾向

教員向けFD研修会を恒常的に行い、教育コンテンツの質を向上していく必要があるのでは

6

参考. 「学費」と「アルバイト」

第1位 「すべて家庭から」 57.7% (前回比0.2p↓)

第2位 「おもに家庭からで、一部はアルバイト収入や奨学金から」 15.7% (前回比1.7p↑)

第3位 「おもに奨学金からで、一部は家庭やアルバイト収入から」 14.8% (前回比0.1p↑)

過去3回の調査同様、「すべて家庭から」が第1位で、約6割を占める
減少傾向にあった「おもに家庭からで、一部はアルバイト収入や奨学金から」が微増

Q. 「アルバイトはしていますか」
長期アルバイト75.1% 短期アルバイト6.4%
計81.5p (前回比3.7p↓)

Q. 「アルバイトは1週間に何時間していますか？」
第1位 「10時間以上20時間未満」 47.3% (前回比0.1p↓)
第2位 「5時間以上10時間未満」 25.5% (前回比5.7p↑)
第3位 「20時間以上30時間未満」 14.1% (前回比4.8p↓)

- ▶ 過去3回の調査同様、第1位は変わらず
- ▶ 全体、アルバイト時間は短くなってきている結果

参考 全国大学生生活協同組合連合会実施
新入生の保護者18,907名の回答
「2021年度保護者に聞く新入生調査」概要報告

〈費用面で準備・工夫したこと〉
第1位 「学資保険・進学用貯金」 55.7%
第2位 「奨学金申請」 32.7%
第3位 「貯蓄切り崩し」 31.7%

参考 全国大学生生活協同組合連合会実施
第57回学生生活実態調査
「半年間にアルバイトをしたか」77.6% (前回比5.2p↑)
・全国的に、就労率は回復傾向
・コロナ禍前よりも1年生で約10p↓、2年生以上で約5p↓

Q. 「今、不安や悩みがあるとすれば、それは何ですか？」

第1位 「進路（就職・進学等）」 57.5% (前回比5.9p↑)

第2位 「学業」 48.9% (前回比5.4p↑)

第3位 「経済問題」 18.7% (前回比0.7p↓)

入学後の年数別「学業」への不安度

1年目57.9%
2年目59.6%
3年生41.8%
4年目33.7%
5年目以上50.0%

- ▶ 低学年が「学業」への不安度が高い
- ▶ 5年生以上は卒業できるかどうかへの不安か

第4位 「友人等との対人関係」
17.6% (前回比1.9p増)

入学後の年数別「友人等との対人関係」
への不安度

1年目27.1%
2年目21.8%
3年生10.1%
4年目9.8%
5年目以上12.5%

- ▶ 低学年の不安度が高い
- ▶ 交友の機会と場が制約されたままの現状が影響している、といえる

自由記述欄〈授業について〉〈授業や行事関連の情報提供について〉には、154件の意見が寄せられている

Q. 「授業について希望することは何ですか」

第1位 「レジュメを配布してほしい」 37.6% (前回比1.5ポイント↑)

第2位 「学生の理解度を把握しながら授業を進めてほしい」 31.4% (前回比6.6ポイント↑)

第3位 「演習やフィールドワークの時間を増やしてほしい」 16.9% (前回比4.0ポイント↑)

「2021 (令和3) 年度 コロナ禍における学習実態調査」
〈Q10. オンデマンド型授業で学習効果の高いコンテンツは何ですか〉

第1位 レジュメや資料46.2%

第2位 動画教材41.1%

第3位 質問できる機会7.5%

第4位 音声動画 4.9%

8割強の割合で、レジュメや資料
と動画教材が評価されている

オンデマンド型授業の場合、Zoomを用いて録画をする際、レジュメや資料を画面共有するだけではなく、必ず、それらもGoogle Classroomにアップすることが必要という結果なのは

- ・両調査を照合しても、学生はレジュメや資料の配布要望度が高い
- ・理解度を確認しつつ、授業を進めてほしい、という要望が強い

9

オンデマンド型授業における学生理解度へのアセスメント

従来、オンデマンド型授業は形態的にも構造的にも、学生の理解度を確認しながらペースを調整したり、学生が質問したりすることは難しい、と指摘されてきた

オンデマンド型授業

- ・配信された動画・録音教材を閲覧することで学びを深める「学習」
- ・学習した内容が正しく理解できているかを確認する「評価」
- ・近年、これら2つのパートによって構成すべき、という指摘

LMSを活用すれば、学生の理解度を確認しつつ、質問にも応答することは十分に可能。

質問や感想などを寄せられる
プラットフォームの存在

一例

- ・ Google Classroomの活用
- ・ Google Formsの活用

教員が寄せられた質問に答える動画をアップしたり、オフ会としてオンライン交流会などを設けることも一案か

対人関係の不安度を解消していくためにも、低学年が履修する授業などでは重要なのではないかと

10

学生の〈充実度〉を高めるために

〈充実度〉 = 「充実している」と「ある程度充実している」の合算値（値はPと略）

〈非充実度〉 = 「あまり充実していない」と「充実していない」の合算値（値はPと略）

2021年度調査 〈充実度〉 : 52.9P (前回比15.6P↓)

2021年度調査 〈非充実度〉 : 16.1P (前回比10.1P↑)

入学後の年数別充実度/非充実度

1年目 〈充実度〉 51.9P	〈非充実度〉 14.9P
2年目 〈充実度〉 41.2P	〈非充実度〉 24.9P
3年目 〈充実度〉 54.9P	〈非充実度〉 14.9P
4年目 〈充実度〉 64.2P	〈非充実度〉 9.3P
5年目以上 〈充実度〉 52.1P	〈非充実度〉 18.7P

〈参考〉2021年度『卒業時アンケート』

成長実感度91.3P

「とても実感している」 36.1%

「まあ実感している」 55.3%

総合満足度91.3P

「とても満足している」 34.2%

「まあ満足している」 57.1%

- ・2020年度入学生の〈充実度〉の低さ・〈非充実度〉の高さが顕著
- ・自由記述欄からうかがえる大学への希望・要望 = 〈授業〉関連が多い

学生たちの〈充実度〉を高めていくには、授業への満足度を高めることが重要といえるのでは
教育コンテンツのよりよいかたちを、教員全体で議論していく必要があるのではなかろうか¹¹

おわりに

- ・学生たちの〈充実度〉を高めていくには、授業への満足度を高めることが重要といえるのでは
- ・遠隔授業のうち、オンデマンド型授業の質をあげる方策を検討し、学内で共有していくべきでは

動画・音声の教育コンテンツの充実とともに、LMSを活用した学生たちとの関わりも重要

- ・学生支援の新たな個別領域に、遠隔授業への対応や支援があげられてきている現状
- ・担当部署だけで解決できるものではなく、教員・学部学科との密な連携が不可欠

すでに提示しているヒント集（教職員ポータルサイト 学生支援課にアップ済）

「大学授業におけるスライドのユニバーサルデザイン」

「障がいのある学生が受講する授業での合理的配慮とは」

「聴覚障がいのある学生が受講する授業での合理的配慮とは」

「視覚障がいのある学生が受講する授業での合理的配慮とは」

「肢体不自由のある学生が受講する授業での合理的配慮とは」

「発達障がい学生が受講する授業での合理的配慮とは」

「障がいのある学生が受講する授業での合理的配慮とは」 参考資料

学生支援機構としても、今後、さまざまな授業運営のヒント集などを提示していきたい、と思います

12

第3回 FD 研究会「学生アンケートから見る Google Classroom の使い方」【後編】

実施方法：オンデマンド動画配信

実施期間：2022年3月29日（火）～5月31日（火）

講師：岡崎 祐司（教育推進機構長）

齊藤 利彦（学生支援機構長）

新井 康友（学生支援推進室長）

稲永 知世（文学部英米学科 准教授）

長光 太志（社会学部現代社会学科 講師）

上田 道明（社会学部公共政策学科 教授）

橋本 憲尚（教育学部教育学科 准教授）

1.2年生を対象に実施した「2021（令和3）年度コロナ禍における学習実態調査」の中で、教育効果が高かった授業との意見が多く寄せられた4人の担当教員に、Google Classroomを使った授業デザインや授業運営の工夫について、Google Classroomの実際の授業の画面を見ながらインタビュー形式で話を聞いた。

稲永 知世 准教授「英語と英米文化」（2021年秋学期授業）

インタビュアー：岡崎 祐司（教育推進機構長）

<稲永 知世先生からの実践報告>

この科目は文学部の科目で、英米学科の学生は履修できず、中国学科の学生は必須で履修、日本文学科の学生は希望者のみが履修する科目である。授業の内容は「サッチャー」や「イギリスのEU離脱」「ジェンダー」等を取り上げている。毎回の授業は、動画、資料、授業内課題、確認テストの4つで構成されており、授業内課題は、資料に基づいて学生自身が調べ自主的に学ぶ形式としている。例えば、第2回授業の授業内課題に「カナダ政府の人口調査局のHPを見て、以下の地域のフランス語母語話者の比率（2016年）を答えなさい。」という設問とし、学生自ら調べるといった課題としている。基本的に英米学科以外の学生が履修するので、英語に興味のない学生も履修している。そのため英語の文化を知るだけでなく、自ら調べ、自分で勉強する姿勢を持って欲しいという思いから、授業内課題を課している。確認テストは、資料に基づく内容確認のテストとし、こちらもGoogleフォームで作成している。

授業で取り扱うテーマについて、例えば第10回の「ジェンダー」についての講義では、GilletteやP&Gのキャンペーン等を取り上げた。講義動画は、PowerPointに音声をつけて作成している。動画の中で終始顔が映っていると気になる学生がいるのではないかと配慮し、顔を出さない動画としたが、中には私の顔を見たいという学生もいるので、初回の

授業で大学の HP に私の写真が掲載されていると伝えている。

動画は 1 本あたり 40 分ほどにまとめており、動画を視聴後、課題に取り組む授業スタイルとしたが、動画が長いと感じる学生もいると思うので、事前にどの分野が何分ほどあるか、説明し、分割して視聴するよう指示した。また、PowerPoint のスライドは、重要な箇所は赤文字で表示しているが、赤ばかりも見づらくなるので、黄・緑を使用する等、色によってのルールよりも配色のバランスを重視している。

2020 年度は、最終レポートとして 1 回のみで評価を行ったが、期末に 1 回の課題で評価を行うのは学生に負担が大きいと考え、今回は最後のレポートの代わりにミニレポートを 3 回課すこととした。1 つのミニレポートは、設題は 2 問とし字数は 1 問 250 字以上とした。ミニレポートの締切を全て 2 月上旬としたため、授業内ではレポートについてのフィードバックは行わず、限定コメント機能を使って全員にコメントをした。

成績は、授業内課題と確認テスト、ミニレポートの 3 点で最終評価とし、学生には第 1 回目の授業でシラバスの内容も含めて、採点の割合について説明を行ったと報告された。

<報告に対する質疑応答>

岡崎：詳細なご報告、ありがとうございます。授業内課題についてお伺いしたいのですが、課題の難易度は、比較的高く設定しているのですか。

稲永：すぐに課題を終える学生もいれば、提出直前まで時間がかかり、慌てて提出してくる学生もいました。学生によってその難易度の感じ方に差があるようです。

岡崎：確認テストを課していたとのことですが、何割程度の学生が提出していましたか。

稲永：おおよそ 8 割くらいは提出してくれていました。

岡崎：第 10 回のジェンダーをテーマとした講義の際には、Gillette や P&G といった企業のキャンペーン等を取り上げながら、ホモソーシャルな問題を学生に投げかけていますが、学生の反応はどのような感じでしたか。

稲永：受け取り方は様々で、「今まで考えたことがなかった」「生きづらい世の中に今はじめて気づいた」「私はそうとは思わない」等の反応がありました。

岡崎：そのような現代社会が抱える課題に触れることが、学生にとっては社会へ出る第一歩となっているのでしょうか。学期中に 3 回課しているミニレポートですが、回答の内容はいかがでしたか。また、以前の対面授業の際も、このような授業内課題や確認テスト、ミニレポートを課すスタイルで授業をされていたのですか。

稲永：結構、考えて書いている学生が多かったように思います。中には的が外れているレポートもありましたが、ヒントを与えたうえで問題を課しているので、大半は頑張って回答してくれました。対面授業の場合は、授業内課題は、授業中に学生同士で話し合いながら回答、確認テストは次回の授業で回答して、採点し、返却する流れでした。対面授業の時は試験をしていましたが、試験内にレポートを書くという問題も設定していました。

岡崎：遠隔授業はリアルタイム、またはオンデマンドどちらがやりやすいですか。

稲永：どちらもいいところがあると感じています。この科目は 120 名履修する講義形式なので、リアルタイムですと、1 人に回答してもらおうと他の学生は手すきになってしまうので、この授業の場合は、オンデマンドの方が教育効果が高いと感じています。

岡崎：最後に、遠隔授業の反省点や改善したい点はありますか。

稲永：情報量が多かったことが問題だと感じています。また、学生のミニレポートの中で、アニメについての話を織り交ぜて議論していたものがあつたので、学生がよく知っているポップカルチャーについても、テーマとして取り入れていけばよかつたと感じています。

岡崎：稲永先生の遠隔授業は、体系的にデザインされていて、授業の中の授業内課題、確認テスト、ミニレポートと学生が継続的に課題に取り組まなくてはならない形式であり、学習することで着実に学べた実感が学生にはあるのではないかと感じました。今回は貴重なご報告、ありがとうございました。

長光 太志 講師「現代社会論」(2021 年秋学期授業)

インタビュアー：新井 康友 (学生支援推進室長)

<長光 太志先生からの実践報告>

遠隔授業を実施する中で、学生の学習を促すサイクルについて、特に工夫を行った。例えば、学生が授業を聞くだけにならないように課題等を重要視し、学生へのリフレクションを大切にすることを心掛けた。また、あくまで課題は授業の理解を深めるために出しているという前提に立って、レポート課題を課すのではなく、授業への理解を深めるためにノートを作成し提出してもらうこととした。授業動画を作成する際は、学生にノートを作成してもらうことを前提に 45 分～1 時間の動画にし、学生が見直す時間も含めて 90 分になるように工夫した。

ノート作成については、「Q1.今回の授業の内容を 400 字以上でまとめなさい」「Q2.授業の感想を書いて下さい」の 2 つに触れながら作成してもらうことにした。基本的には、毎回の授業で提出が原則だが、体調不良等、様々な理由で提出できない学生もいるため、減点はするが、最終授業までは受け付けることとし、1 回でもノートの提出がなければ、不合格とするルールとした。

授業動画を作成するにあたっては、ラジオやポッドキャストをモデルにして作成した。理由としては、対面授業では周りに他の学生がおり集団になるが、オンデマンド型授業を受ける感覚は、1 対 1 といったラジオを聴く感覚と似ていると感じたからだ。例えば、冒頭にはバックミュージックを入れ、これから授業が始まるという印象付けをしたり、パーソナリティが自分だけに話しかけているという雰囲気を作るよう工夫した。

また、ラジオのお便りコーナーのように、提出してもらったノートから良いものを取り上げるノート紹介を行った。当初はリフレクションのためにノート紹介をしていたが、学期の

後半になると、良いノートを見て学生は触発され、さらに良いノートが提出されるなど教育効果も高まった。

2つ目の動画作成の工夫としては、学生に集中して動画を視聴してもらうために、動画内で質問を投げかけるようにしたことだ。例えば、「個人的行為を対象に憲法違反を訴えることが出来るのか」という問いを、具体的なシチュエーションに落とし込んで学生に投げかける。そして正答や判断の根拠について、教員がすぐに教えるのではなく、問題の成立経緯や学説展開を説明し、講義全体を通して回答を行う構成にした。また、動画の最後には、必ず授業のまとめを掲示し、ノートをまとめるポイントを明示していた。

動画については、「ラジオっぽさを意識すること」「リフレクションを行うこと」「冒頭に問いかけを入れて授業全体を通じて答えていく」「ノート課題にまとめる内容を明示する」の4点がポイントである。

私は動画編集をした経験があったので、編集に適したPCや編集ソフト（Premiere Pro）を使用できる環境であったことが大きかった。ただ、もしこのような作業をどの先生でも取り組めるようにしたいのであれば、編集環境の援助やノウハウに関するフォローが必要であると思う。また授業によっては、動画教材が不向きな授業もあるし、各教員の長所と授業の性質、大学のフォロー体制が噛み合って初めて質の高いリモート授業が成り立つのではないかと考える。

最後に遠隔授業のメリット・デメリットについて。まずデメリットとしては、導入のハードルが高いということ。動画編集の経験である私でさえ、当初は抵抗があった。メリットとしては、1点目は、授業動画を作成してしまえば、その授業時間は教員の自由となること。学生が自由な時間に授業を受講するという事は、教員も自由な時間が持てるということである。2点目は、教員自身が授業を客観視できるという点である。対面授業では、自身の授業を見ることはできないが、遠隔授業では動画を見ることで、説明がうまくできていない部分などが見えてくる。また動画のコンテンツ作りが上手くなるにつれて、授業の構成も上手くなるのではないかと感じている。動画は後から編集が可能であるため、脱線した部分のカットや内容不足な部分を補うことも可能なので、授業設計を修正できることもメリットだと感じたと言われた。

<報告に対する質疑応答>

新井：詳細なご報告、ありがとうございます。学生の授業アンケート回答の中には、「ノートを作成することで勉強になった」とコメントがありましたが、授業動画とノート作成といった他の遠隔授業では見ない、工夫された取り組みだと感じました。

長光：遠隔授業が始まり、レポートなどの課題を多く出しすぎると、学生は課題に追われ、課題にじっくりと取り組めないのではないかと考えました。課題は、あくまで授業の理解を深めるために出しているという前提に立ち、ノートを作成し提出してもらうこととしました。

新井：遠隔授業について、各教員や学生、授業の特性に応じた授業を展開していくことがポ

イントであり、動画作成については、大学としてのフォロー体制も必要であると指摘されてきましたね。

長光：動画作成は、動画編集をしたことのある私でさえ戸惑うことが多かったので、様々なフォローがあれば、よりよい遠隔授業ができると思います。

新井：貴重なご報告、ありがとうございました。これを機に、様々なフォロー体制ができればより良い遠隔授業が展開できると感じました。

上田 道明 教授「現代市民論」(2021 年秋学期授業)

インタビュアー：齊藤 利彦 (学生支援機構長)

<上田 道明先生からの実践報告>

現代市民論は、社会学部の学部基幹科目であり、1 年生から受講が可能な基本的な知識を修得するための科目である。2021 年度秋学期は、約 250 名ほどの学生が受講しており、高い割合で 1 年生が受講していた。

授業は、レジュメと音声ファイルを掲出し、学生にはなるべくプリントアウトしたレジュメを手元に用意して、メモを取りながら受講するように指導した。

成績評価は、学期の中で 2 回の間中テストと最後の定期テストで成績をつけた。その他、毎回任意のレポート (字数 200~400 字) を課し、評価の高いレポートには、ボーナス点を与えるようにしていた。

今回のオンデマンド型授業の学習の効果については、端的にレポートの文章作成能力が向上したと感じている。毎回のレポートを通じてライティングの指導ができたので、学期末のレポートでは、意欲の高い層は対面授業の時よりも文章の質が向上していた。

遠隔授業で感じたことは、学生の学びの深まりが、対面授業とは違う形でできている。遠隔授業では対面授業よりも、より丁寧に情報を伝えることが必要であり、結果的に学生の学びに繋がったと感じている。しかしながら、意欲の低い層については、任意のレポートは提出せず、明らかに講義を聞いていないと思われる定期試験の答案も見受けられた。この層に対してどのようにアプローチしていくべきかが難しいと感じており、意欲の高い層と低い層の二極化が進んだようにも感じた。

Google Classroom ではトピック等を活用し授業回ごとにまとめ、学生にとって見やすいよう工夫したほか、講義日の 3 日前には授業資料をアップするように心がけ、掲示板機能を活用してレポートの締切などを記入し、学生とコミュニケーションをとるようにした。

定期試験については、結果や評価についてフィードバックも行った。フィードバックの目的は、完成度の高い答案を評価することとあわせて、60 点未満の答案について、なぜ評価が低かったのか説明を行った。

この授業で注力した点として、先程もお話ししたがレポートの書き方について、学生に指導を行ったことだと感じている。2020 年度の遠隔授業の際は、説明不足の答案が多く提出

され、課題を感じていた。文章は本来その人の性格が表れるものであるため、レポートの書き方を教えるのに抵抗があったが、まとめ方が分からない学生、特に1年生中心の講義であるため、モデルとなるレポートの作成方法を提示した。テンプレートを示すことで一定の文章作成ができるようになったが、定期試験では、そのようなテンプレートがないので、元の未熟な文章に戻っている学生がいた。テンプレートの形で書くことを定着させ、それを応用して自分の文章を書けるようにするのは、課題が多いと感じた。

<報告に対する質疑応答>

齊藤：詳細なご報告、ありがとうございました。2020年度春学期より急遽、遠隔授業を実施することになりましたが、当初の上田先生のお気持ち、また遠隔授業実施から2年が経過した今現在のお気持ちはどのようなものでしょうか。

上田：まず遠隔授業が始まった当初は、学生は好きな時間に、何度も繰り返して授業を受けることができるが、意欲の低い学生は決まった時間に受けることは難しく、また、自主的に受講することすら難しいのではないかと考えました。そのため、何らかの課題を与えることが学生のためだと考え、2021年度は課題の分量を少なくするとともに任意提出に切り替えました。

齊藤：2020年度の課題はどの程度の量だったのでしょうか。「課題地獄」というワードが浮上し、大学の授業が指摘されるというニュースもありましたが、先生の授業はどのような感じでしたか。

上田：毎回、課題を課したことが反発につながったと感じています。毎回の課題の中で、質問を受け付けるようにしたところ、「課題が多い」という声が寄せられました。

齊藤：先生のオンデマンド型授業は、レジュメと音声ファイルを掲出するといった形態でしたが、この授業形態にされた理由や狙いは何だったのでしょうか。

上田：同じオンデマンド型授業であっても、教員によって授業形態は変わるので、私の考えを述べると、まず、伝えたいことを学生に深く理解してもらいたいという思いから、昔ながらのレジュメが役立つのではないかと考えました。レジュメに書ききれなかった内容は、音声を聞いてもらい、学生にメモを取ってもらい情報を再構成し、深く理解してもらえないのではないかと思います、このスタイルとなりました。昔ながらの方法でも、このようなメリットがあると考えています。

齊藤：先生のご報告の中で、遠隔授業の教育効果として、文章作成能力の向上を挙げておられ、他方で能力が向上しない層が存在するとご報告されていましたが、これは全国的にも問題となっていて、二極化の問題が注視されています。その対応として、先生はレポート作成のテンプレートを示して、学生にその型を覚えさせる取り組みをされていましたが、型ができないままに4年生になり、卒業論文等で苦労する学生も見受けられます。このように1年生の時期からレポートの書き方について学ぶことは大変重要だと感じています。

それでは最後に、次年度へ向けたお考え等ありましたらお願いします。

上田：2022 年度春学期は全て対面授業ですが、遠隔授業のよい点は対面授業にも活かしていきたいと考えています。Google Classroom を活用し、任意のレポートを対面授業でも実施することで、書く力が伸びると思います。『ローテクな授業でも評価してくれる学生がいます。ローテクの先生方も一緒に頑張りましょう』

斉藤：貴重なご報告、ありがとうございました。

橋本 憲尚 准教授「教育心理学」(2021 年度秋学期)

インタビュアー：岡崎 祐司 (教育推進機構長)

<橋本 憲尚先生からの実践報告>

教育心理学は教職課程科目であり、学習目的の第一は基礎知識の定着である。遠隔授業には様々な授業スタイルがあるが、この目的にそった授業資料の作成がオンデマンド遠隔授業の肝と考えた。また、教職課程を履修する意欲の高い学生が受講していたため、学生が課題に取り組む必要性を感じることができるよう工夫した。

PowerPoint スライド 1 枚(授業 1 回当たり 3～4 枚)にある程度まとまった知識構造をわかりやすく示し、ポイントごとに音声ファイル(スライド 1 枚当たり 5～6)を付ける工夫を行った。また、毎回の授業タイトルを記したスライドには、イントロダクションとして授業の趣旨・概略を伝える音声ファイルも付した。遠隔授業は担当教員によって授業スタイルが多様なため学生が混乱しないよう学習手順を明確に示す必要がある。特に、学期の前半では「ダウンロードができない」「PowerPoint のスライドショーができない」等学生からコメントが届いたため、パソコンの操作手順も丁寧に説明する必要性を感じ、毎回の授業でスライド 1 ページ目には学習にあたっての留意事項を掲出した。また、最終的にどのような課題を作成し提出するのか、学生が見通しをもって学習できるように予め説明も行った。資料も PowerPoint のレジメだけでなく、「日本の子どもたちは世界と比べて本当に意欲が低いのか」といった教育現場で浮上している問題等の資料も掲出し、読解や解説も行った。

授業ではスライドではじめにイントロダクションで授業の趣旨を伝え、最後のスライドでは課題を 2 つ、1 つ目は「概念整理」(基本的な用語説明や用語を使った要約文作成)、2 つ目は「概念検討・吟味」(学習内容を踏まえた教育実践場面に関する論述)の異なる 2 タイプの課題(いずれも回答文字数範囲を指定)を毎回提示した。概念整理では、指定したキーワードを使いながら、学生自身が文章を作成する課題となっている。指定するキーワードは、PowerPoint の様々なページで使われており、全体のスライドを学習しないと解答ができない設問となっている。2 つ目の「概念検討・吟味」は学生自身で考える課題とした。具体例をあげて文章を作成するように指示し、自身の学校の経験や日常生活での事例などをあげて課題に取り組むように促した。

課題回答の提出については、字数・字の大きさ(ポイント)を指定したテンプレートを作成して使用を義務づけた。多数の受講生からの回答の文字数を一目で確認し、記述内容チェ

ック時間の短縮を図るための処置である。テンプレートの枠に学生が文章を作成するため、一目で文字数が少ないものの判別がつく。この授業の受講者は 150 名ほどであり、チェックを要する回答数が多いが、一律的に短時間で確認が可能となった。しかし、文字数や様式に拘らず、学生の自由な発想を問うような課題であれば、テンプレートは不要だろう。また、課題の提出期限は 2 週間後とした。インターネットの不調によって提出が遅れた等の理由を訴えても期限が過ぎれば課題回答は一切受け付けない。提出期間を長く設定する代わりに期間内に必ず提出することを徹底した。期限を過ぎて提出された場合は、学生が受け取ってもらえたと勘違いしないためにも学生に返却しており、期間内に提出された場合については、学生に安心感を与えるために受け取りましたとメッセージを送るようにしている。また、提出された回答が課題趣旨にそっていない場合、簡単なコメントを送信し、提出期間内であれば修正再提出を受け付けている。

このようにスライドや課題の出し方を工夫することで、細かな知識の定着の目的を達成すべく、ポイント事項を効率良く何度も復習できる教材提供を目指したわけである。どのスライドに何が(場合によっては全スライド)説明されているか確認をスムーズに進行させるために、詰め込みの印象はあってもスライドの枚数は限定しておく。分かりにくい箇所焦点を当てて繰り返し学習できるよう、細かな事項ごとに短い音声ファイルを挿入する。課題は毎回の授業の学習目標であって、この課題達成のために学生が自分のペースで学習できるよう教材設計を心がけた。

<報告に対する質疑応答>

岡崎：詳細なご報告、ありがとうございました。課題を見てそれと関連のある箇所だけを効率よく学習しようとする学生もいますが、それを想定されてこのスタイルなのでしょうか。

橋本：どのような課題を課しても、学生はそのように学習すると思います。ただし、「概念整理」の課題では、すべてのスライドを確認しないと課題に取り組めないようになっているので、正しい解答をしようとする、一連のスライド確認が必要になります。音声ファイルを分けて PowerPoint スライドに付けているので、わかりにくい箇所だけを再度再生することが可能です。この授業では最低限の学習目標が達成できるよう、学生が自分のペースで自由に学習できることを念頭に置き設計しました。

岡崎：1本の動画では復習したい箇所を探すのが大変だけれど、トピックごとに音声がかかっていると、復習したい箇所を見つけやすく、必要な箇所だけを視聴することができます。当初からこれを考慮して授業構成を考えていたのでしょうか。

橋本：この科目は細かな知識の定着が目的であるため、効率が良く何度も復習できる学習方法をコロナ以前から漠然とイメージしていました。私が授業で説明することよりも、LMS を使用し、繰り返し学べる授業の方がよいのではないかと思いました。また、本学は通信教育課程もあるので、いずれ大人数講義はこのような遠隔授業に移行され、今後、教員は少人数のクラスに力を入れ、対面授業でしかできないことをするべ

きではないかとも考えています。

岡崎：一定の人数で知識を得るという目的の授業では、このように繰り返し学修できるスタイルが有効ではないかと私も感じています。貴重なご報告、ありがとうございました。

2022年度に向けたシラバス作成研修会

実施方法：オンデマンド動画配信

視聴期間：2021年12月20日（月）～2022年3月24日（木）

講師：岡崎 祐司（教育推進機構長）

◆内容

まず「シラバスの役割」について、学生にとっては授業を選択する際に、情報を得るためのものとなり、教員にとっては授業の設計図となると述べられた。学生はシラバスを見てどのような授業かを想像し、選択することになる。また、教員は学生にどのように授業に取り組んでほしいか、学生に求めたいことを提示できる、学習成果を高めるための情報提供でもある。次に本学のシラバスからいくつかの項目を取り上げ、解説された。

「授業のテーマ」は、それを見て概ね授業の内容がイメージできるようなトピックスやキーワード、先生方がここは面白い、興味深いと感じていることが伝わるように書いていただき、「授業の目的・ねらい」は先生方の独自性を出していただく部分で、科目担当者としてこの授業で受講生に何を理解してほしいと思っているのか、どんなことを伝えたいのかを書いて欲しいと説明された。

「毎回の授業のテーマの注意点」について、これは授業の目的・ねらい、到達目標を考えたときに、先生方の専門性に基づいて15回どのように進めていくかという設計図となる。ただ、実際授業を行ってみて、学生の理解が追い付いてないことがわかれば、順番を変えるなど柔軟に対応すべきで、必ずしも当初のシラバス通りに15回進めなければならないわけではない。その他、授業時間外の学修や参考文献の書き方などの注意点が続いた。

最後に、現行のシラバスは講義概要の延長線上にあり、学生が授業のたびに毎回確認するようなどころまではできていないと思うが、この授業で学生に何を学んでほしいのかを伝えることができる、学生と教員をつなぐツールであると述べられた。この授業を受けて、学生がどのように変化するかイメージしながら書いて欲しい。また、高校までの学び方から脱却できない学生も多いので、大学での学びの方法やあり方を知ってもらう役割もある。履修登録の時だけでなく、授業期間中にも活用して欲しい。シラバスをしっかりと読みこみ、学生の豊かな学びにつなげてほしいと締めくくった。



2022年度に向けた シラバス作成研修会

講師：岡崎 祐司

教育推進副機構長

2021年12月1日～

1. 今日のセミナーの内容

<今回の内容>

- ▶ シラバスとは何か？
- ▶ シラバス作成時の注意点

30分程度の動画となっています

2. シラバスの役割とは？

1. 授業履修・選択の情報提供
2. 授業の設計図（計画書）
3. 受講生に何を求めるか？－取り組み内容や姿勢
4. 学習効果を高めるための情報提供
5. **成績評価において、評価方法や基準を示し**
6. カリキュラムにおける科目の位置づけ
(DP・CPと科目の関係を示すツール)



多機能な教育支援
ツールと言える

2

3. シラバスの項目（佛教大学）

- ▶ 授業のテーマ
- ▶ 授業の概要
- ▶ 授業の目的・ねらい
- ▶ 毎回の授業テーマ・内容
- ▶ 到達目標
- ▶ 授業外の学修（予習・復習等）についての具体的な指示
- ▶ 受講に当たっての留意事項
- ▶ 成績評価の基準
- ▶ テキストについて
- ▶ 参考文献について

3

4. シラバス作成時の注意点



この3項目の違いを整理しましょう。

項目	書く内容	注意点
授業のテーマ	<ul style="list-style-type: none"> 学生が、授業内容、ねらいを概観できるようなトピックやキーワード。授業への招待 	<ul style="list-style-type: none"> 例) 過疎地の復興 例) 患者に寄り添えるコミュニケーション 例) 数学・統計 例) 社会で“必ず役立つ”経済学
授業の概要	<ul style="list-style-type: none"> 学部学科が規定したカリキュラム上の位置づけから見た授業の全体像、また、法令等で規定されている内容。DPとの関係。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業担当者は修正できません
授業の目的・ねらい	<ul style="list-style-type: none"> 担当者として受講生になにを理解してほしいのか。視点、理論、価値、知識、技能 教員側からの到達点 	<ul style="list-style-type: none"> 学ぶ意義、未知の学びへの招待。どこが面白いのか。 教員として大切にしていること、重視していること。 15回の授業後の受講生の成長イメージをもつ

4

4. シラバス作成時の注意点

「毎回の授業のテーマ」についての注意点

- ▶ 学外授業を実施する際はその詳細を示す。
☞ここでは学外授業であることをだけを示し、場所、内容、経費などの詳細は「受講に当たっての留意事項」に記す。
- ▶ 毎回の授業テーマについて、同一文言を避ける。
☞「授業の振り返り①」「授業の振り返り②」
↓ ↓ ↓
「授業の振り返り① -前回の授業の振り返りと課題の共有-」
「授業の振り返り② -課題解決のグループ発表-」
- ▶ オムニバス、分担科目の場合は、各回に担当者を記す。

5

4. シラバス作成時の注意点

「到達目標」についての注意点

- ▶ 一つの文章に一つの目標を書く。

例) 「必要充足」、「普遍主義」の政策原則から福祉サービス制度の意義を理解するとともに、現行制度の問題点を指摘し、かつ地域ケアにおける保健・医療との連携の手法を生活者中心の立場から説明することができる… ???



- ① 「必要充足」、「普遍主義」の政策原則から福祉サービス制度のあるべき姿を理解したうえで、現行制度の問題点をひとつ、指摘することができる。
- ② 生活者中心の立場から地域ケアにおける保健・医療との連携の手法を具体例を設定して説明することができる

6

4. シラバス作成時の注意点

「到達目標」についての注意点

- ▶ **学生が目指すべき到達目標**の基準を示しておく。
理解、知識の獲得、それらを活用した考察という思考過程
→具体的な「表出」：論理的に構成された文章、行動や技能など
- ▶ **学生を主語にしてみる。** 学生自身が授業を受けた結果、得たものを、何によってあらわすのか、ある程度イメージできるようにする。
☞ 次のページで

7

4. シラバス作成時の注意点

「到達目標」の表現

- ▶ 動詞を使った表現で学生にイメージをもってもらおう。ただし、その前提として授業内での学習、自己学習、考察という「実践」があることも理解してもらおう。

領域	使用する動詞
知識領域	・述べる ・列挙する ・説明する ・分類する ・比較する ・関係づける ・特定する ・予測する ・具体的に述べる ・応用する ・予測する ・具体的に述べる ・応用する ・適用する ・批判する ・評価する ・一般化する ・指摘する など
技能領域	・測定する ・模倣する ・工夫する ・準備する ・実施する ・行う ・熟練する ・操作する ・触診する など
態度領域	・参加する ・コミュニケーションをとる ・尋ねる ・協調する ・配慮する ・議論する など

4. シラバス作成時の注意点

「到達目標」についての注意点

- ▶ **到達目標は、成績評価の観点・基準、方法と一体で設定する必要がある。**



到達目標はそのまま成績
評価項目となる。

**適切な目標は、学生の自
学自習を促す。**

4. シラバス作成時の注意点

「授業時間外の学修（予習復習等）についての具体的指示」についての注意点

- ▶ 授業の到達目標を達成するために必要となる授業外学修（予習・復習）の時間を示す。
☞ 2単位の講義科目であれば90時間の学修が必要となり、**予習・復習に必要な時間は60時間。**
- ▶ 単位取得は、授業外での自己学習とともに成立している。学生の学びを豊かなものにしたい。そのヒントを提供する。
- ▶ コロナ禍の遠隔授業では、課題提出が多くなり、学生の授業時間外学習時間は増加し不満の声もあるが、一方で**適正な単位制の学修になっているとも言える。**

10

4. シラバス作成時の注意点

「受講に当たっての留意事項」についての注意点

- ▶ 受講に当たって注意することや心構えを示す。
- ▶ **学外授業を実施する場合は、場所、時間、経費等の詳細を記す。**
- ▶ 授業で必要な文具（ハサミ・のり）など必要なものがあれば記す。
- ▶ 多様な学生に対応するため、アクティブラーニング（ディスカッション・ディベート・発表など）を導入している場合は、その内容も記す。

11

4. シラバス作成時の注意点

「成績評価の基準」についての注意点

- ▶ 成績評価は到達目標に達成したかどうかを評価するもの。**到達目標に記した全ての項目**について評価します。
 - ☞ 期末試験だけで評価できるか？
- ▶ **中間段階・後半での試験やレポートの実施、授業内容の節目でのコメントなど2つ以上の項目によって評価してください。**その場合、その配分割合は必ず100%になるよう設定してください。
- ▶ 学生から採点根拠の質問に答える—**明確に設定しておきましょう。**



成績評価については、
その基準を具体的に示すことが重要。

12

4. シラバス作成時の注意点

成績評価の基準（例）

項目	割合	備考
定期試験（教室）		
定期試験（課題）	40%	到達目標に示した項目に対する到達度によって評価する。期待値以上に達成できていれば100～90点、十分に達成できていれば89～80点、ほぼ達成できていれば79～70点、もう少し努力が必要な場合は69～60点、求める最低水準に達せず更なる努力が必要な場合は59～0点とする。
授業内発表	20%	グループワークにおいて各項目5点満点で評価する。 ①準備をして取り組んでいる。②話し合いに積極的に参加している。③グループに貢献するように作業している、④うなずき、あいづち、アイコンタクトができています。
授業内試験	30%	B-netによる3回の小テストを実施し、各回10点満点とする。
授業内課題		
その他	10%	5% 受講態度・発表の積極性 5% 7週目に行うB-netのディスカッションで意見を出している

※出席は点数化しない！

13

4. シラバス作成時の注意点

「テキスト」「参考文献」についての注意点

- ▶ 「テキスト」は**学生が購入する必要**のあるもの、「参考文献」は**学生の購入が必須でないもの**となります。あわせて、テキストの使用方法についても留意事項でも説明してください。
- ▶ 「テキスト」購入可能なものとしてください。絶版、旧版のものは指定しないでください。
絶版、旧版のものは**「参考文献」として取り扱い**、授業内にてご紹介をお願い致します。
※絶版のものでも、他社や書籍名を変えて出版している場合があります。

14

シラバスと教育の改善

- ▶ 担当教員として、授業に取り組む姿勢、大切にしていることを示す。
- ▶ この授業で学生に何を学んでほしいのか、何を獲得してほしいのかを伝える。
- ▶ この授業を通して、未知のことを学び始める学生が、どう変化するか、成長するかをイメージする。
- ▶ 大学での学びの方法やありかたを学生に知ってもらう（学びをもっと豊かにしてほしい）
- ▶ 履修登録の時期だけではなく、授業期間中（特に開始時）にも活用する
- ▶ 成績評価－中間段階や後半での小テストやレポートの活用→可能な方法で評価の返却、全体的なコメント
- ▶ 多くの学生の学びの姿勢・取り組みをもっと豊かにしたい、活性化したい

16

2021 年度その他活動

佛教大学教員職員合同研修

〔シリーズⅠ〕 コロナ禍のなかの学生生活ー学生生活・遠隔授業・学生支援ー

実施方法：Zoom・オンデマンド動画配信

実施期間：Zoom 2021年6月30日（木）16：30～18：00

オンデマンド 2021年7月6日（火）～2021年8月6日（金）

講師：齊藤 利彦（学生支援機構長）

岡崎 祐司（教育推進機構長）

新井 康友（学生支援推進室長）

中嶋 力都（学生支援部長）

吉川 奈見（教育推進部長）

2021年3月13日から3月31日に実施した「2020年度秋学期コロナ禍での学生生活に関するアンケート」の結果を基に、齊藤学生支援機構長よりその分析結果について報告をいただき、その後、新井学生支援推進室長より話題提供いただいた。

◆報告1

「2020年度秋学期に学生が考えたこと」

ー『2020年度秋学期コロナ禍での学生生活に関するアンケート』の振り返りー
～学生生活・遠隔授業・経済状況～

発表者：齊藤 利彦（学生支援機構長）

1. 2020年度秋学期学生生活への思い

今回、「2020年度秋学期コロナ禍での学生生活に関するアンケート」（以下、本調査）の報告としての主旨は、本調査結果の振り返りを行い、コロナ禍の中で、学生がどのようなことを感じどのように遠隔授業で学んできたのかを明らかにし、今後のFD、SDに活かすことを目的としており、全学的に情報共有できれば良いと考えている。

まず、「Q1.秋学期の学生生活について春学期と比較して、どのように感じますか」の問いに対しては、「③あまり変わらない（46.1%）」が一番多いコア層となっており、肯定的意見である「②少し良くなった（31.5%）」「①かなり良くなった（12.2%）」は合わせて43.7%を占めている。逆に、ネガティブな意見を見てみると「④少し悪くなった（8.2%）」「⑤かなり悪くなった（2.0%）」となっており、約一割の学生がまだネガティブな意見を持っていることが伺える。コア層である「③あまり変わらない（46.1%）」と回答した学生の回答理由を自由記述から見てみると「秋学期もコロナ禍の収束が見通せなかったこと」「社会生活・学生生活への制限が継続したこと」が挙げられ、今後の見通しが明確でないことから、学生生活が「③あまり変わらない（46.1%）」と評価した理由と推測される。

そして「①かなり良くなった (12.2%)」「②少し良くなった (31.5%)」と回答した学生の回答理由を、自由記述から見てみると、「対面授業再開による友人との交流・教員との交流といった人的交流の復活」「ゼミや実習系科目が対面授業として再開」された点が挙げられ、学生は学習だけでなく学生生活をいかに大切にしているかが見て取れる。

「学生生活が悪くなった」と否定的に回答した学生の回答理由としては、「ハイブリッド型授業による日常への負担が増加」といった自由記述が多く、帰宅後に遠隔授業を受講することや、各科目で出される課題の締切日が違うことで、スケジュールの管理が難しいと考えてり、学生の中には「生活リズムが整えられない」といった声も散見された。

2. 2020 年度秋学期遠隔授業に対する学生の考え

次に、「Q13.秋学期の遠隔授業の授業方法について春学期と比較して、どのように感じていますか」の問いに対して「③あまり変わらない (45.8%)」がコア層を形成し、「②少し良くなった (27.6%)」「①かなり良くなった (7.2%)」の肯定的意見が合計 34.8%を占めているが、他方、「④少し悪くなった (6.3%)」「⑤かなり悪くなった (1.6%)」の割合で否定的な意見を持つ学生がおり、この層についても教員で検討をする必要がある。この設問について、遠隔授業を肯定的に評価している層の理由を自由記述から見てみると、「自分のペースで学べる」「自分の都合のいい時間に学べる」「何度も見直せる」「何度も復習できる」の理由が挙げられる。また、遠隔授業を否定的に評価している層の理由を自由記述から見てみると、「スケジュール管理が難しい」「課題の量」「課題の期日の管理」などが挙げられ、課題の量や期日については全学的な議論が必要ではないかと考える。

「Q15.秋学期は春学期と比較して、遠隔授業で課される課題の量は増えましたか」の問いに対しては、「③あまり変わらない (44.8%)」がコア層となっており、「②少し増えた (18.5%)」「①かなり増えた (9.1%)」と増えたと感じている層が3割にもなることは、一考の余地があるだろう。

また、遠隔授業の不満の中でも「質問の返答、レスポンス」に関する項目が多く見受けられる。今回の自由記述の中からも「質問や問い合わせに対する教員のレスポンスが無い／遅い」「課題を出しっぱなし」「課題の返却時にコメントも添削もない」などの不満が噴出している。これは、早目に返事を出す、課題の返却時には評価を添えるなど教員の一定の努力が求められるところであろう。

「Q16.秋学期の遠隔授業の成績評価について、どのように感じていますか」の問いに対しては「③おおよそ考えていた通り (43.1%)」が最も多く、「②自分が考えていたより評価が良かった (22.1%)」「①自分が考えていたよりかなり評価が良かった (8.8%)」と、考えていた通りが4割、考えていたよりよかったが3割となり、あわせて7割の学生が一定の満足をしていることが伺える。ただ、対面授業も含め2020年度秋学期GPA中央値を見てみると2.75となっており、素点で言うなら80点-82点、つまりA評価が多かったことが伺

え、遠隔授業での成績評価については、今後、大学として確認、検討の余地はあると言える。

最後に、遠隔授業についての学生の意見としては、本学でも他大学同様、対面授業を望む学生とともに、遠隔授業の継続を望む学生が一定数いる。これは、遠隔授業、対面授業の双方のメリットを学生が認知し、どうにかその 2 つをハイブリッドした学習環境を望んでいることが伺え、今後、大学としての対応が求められるところであろう。

3. 2020 年度秋学期学生の経済状況について

「Q7.秋学期の経済状況について春学期と比較して、どのように感じていますか」の問いに対しては「③あまり変わらない (72.9%)」がコア層となっており、その回答理由を、自由記述から見ていくと、「アルバイトに多く入れるようになった」という学生たちに対し「アルバイトのシフトが減った」といった正反対の意見も出ており、学生の雇用についてはその職種や職場によって二極化が進んでいることが伺える。また、株式会社マイナビの調査を見ると全国的に 1 ヶ月の収入が約 4,000 円減収しており、経済状況が悪化しているように見て取れる。

「奨学金利用に関しての回答」の中で「Q10.経済状況の悪化に伴い、奨学金（大学独自・国や民間も含む）を利用しましたか」については、「②いいえ (79.4%)」と利用していない学生が 8 割を占めるが、その他方で「高等教育無償化の学修支援制度」や「教職員互助会の新型コロナウイルス対策緊急奨学金」の申し込みは増加している。

4. アンケート結果から考えてみる学生支援について

本調査から見えた学生支援については、まずはコロナ世代でもある 1.2 年生への対応を考えていく必要がある。特に、学生生活の中で重要とされる友人や教員との交流については不十分であり、そのコミュニティができていない、形成しきれていないことが問題で、コロナ禍での学生生活の充実に向け全学的に検討を進める必要がある。

また、そのようなコミュニティが不十分なこともあり、成績不振学生も増加している。これは成績だけでなく、そもそも履修計画、履修状況が混乱しており、思い違いの中で履修を続ける学生も存在する。これには、各学部学科で手厚いガイダンスや履修指導が必要となるだろう。

更に、コロナ禍の中で生活リズムの変化や、遠隔授業での屋内にとどまる時間が増えたことなど、大きな環境の変化の中で体調を崩す学生もおり、その支援として食事支援「BU ランチ」等を実施しているが、今後も引き続き支援を進める必要がある。

遠隔授業については、学生がそのメリットを理解し始めており、更に ICT 教育がかなりの速度で定着をしている今、対面授業に戻ろうとも、本学でも遠隔授業の高度化や動画コンテンツの充実を図る必要がある。今後は、対面授業と遠隔授業を併用したハイフレックスの

授業が大学教育の中心となるのではないかと予想される中で、その準備も進めていかなくてはならない。また、遠隔授業において障がい学生への対応も整備していく必要がある。学生支援部でも障がい学生に向けた教材作成マニュアルをホームページに上げるなど対応する予定である。

本調査の結果は、様々な視点から行われており、今後の授業運営だけでなく学生支援や種々の業務のヒントとなれば幸いである、と述べられた。

◆報告 2

「秋学期の授業で考えたことー社会福祉学部を例にしてー」

発表者：新井 康友（学生支援推進室長）

2020年秋学期においては「老人福祉論 A」「社会福祉学演習 4A」「社会福祉援助技術現場実習指導 3A」を担当し、「老人福祉論 A」はオンデマンド型授業、「社会福祉学演習 4A」「社会福祉援助技術現場実習指導 3A」は同時双方向型授業で実施した。オンデマンド型授業の動画は、学生が飽きないように45分を2本作成し、90分の動画を作成していた。

対面授業では私語を禁じる事が多く、逆に私語が無いのでストレスなく実施できたが、他方で、学生との質疑等もなく一方通行だったことが反省点である。特にどのような話題や、説明の仕方であれば興味を持って聞いてもらえるのか、迷う時期もあった。また、学生の理解度については、把握を行っていなかったこともあり最終的な評価が甘くなってしまったことも反省点である。

同時双方向型授業については、学生の顔は見えていたものの、学生の性格や特性まで把握することができないまま、実習に送り出していたこともあり、実習先を巡回した時に、施設担当者の方から話を伺い、自分が感じていた印象と大きく違っていた場合があった。結局、同時双方向であっても、表面的な議論となり、実質的な話までに至らなかったといった印象である。また、今までであれば、現場実習を終えた先輩とこれから実習に行く後輩が様々なディスカッションを行うところであるが、遠隔授業により学生同士の関係が希薄なため、グループスーパービジョンまでに至らなかった。最後になるが、今学期の遠隔授業を通して感じたことは、とにかく学生との関わりや学生同士の関わりが減り、それが履修登録、受講に大きく影響していたこと。そもそも、自学自習が苦手な学生は、遠隔授業で学習が進んでいなかった。質問が減ったわけではなく潜在化したことにより、学生の伸びしろを伸ばしきれなかった。そして何より、学生同士がつながる機会を大学がどうにかして作っていかないといけないのではないかと述べられた。

◆意見交換

新井学生支援推進室長より話題提供をいただいた後、岡崎教育推進機構長（以下、岡崎）

がファシリテーターとなり、齊藤学生支援機構長（以下、齊藤）、新井学生支援室長（以下、新井）、中嶋力都学生支援部長（以下、中嶋）、吉川奈見教育推進部長（以下、吉川）の4名より教員、職員の両視点で見たコロナ禍の課題について意見交換を行った。

岡崎：それでは、齊藤学生支援機構長、新井学生支援推進室長、中嶋力都学生支援部長、吉川奈見教育推進部長から、まずは、このコロナ禍の中で学生対応をする中で、感じていることをお話しただけならと思う。

中嶋：今年度の1.2年生については、非常に気にはなっている。2年生は入学式が実施されず、（入学してすぐの）春学期は遠隔授業のみであった。秋学期は、一部対面授業が実施できたが、その中で友達ができた子もいるだろうができなかった子もいるだろう。1年生は高校3年生の時期にコロナ禍となり、最後の1年を充実した高校生活にできなかった。大学は学びの場でもあるが、授業で学ぶ以外にも、多くの学びがある。人と人のかかわりの中で、コミュニケーションを取りながら様々な経験を積むものだが、このリアルなコミュニケーションがない大学生活で大丈夫だろうか、気がかりである。

吉川：2020年春学期は、LMSがB-net LearningからGoogle Classroomへ急遽変更となり、更に、Zoomも導入されたことから、教員からは操作や設定などの技術的な質問が多く寄せられた。秋学期は、先生方の懸命の努力もあって、そのような質問が落ち着いた。授業アンケートを見てみると、遠隔授業への学生の評価は二極化している。学生と教職員の距離が近いことが本学の特徴でもあり、教員が丁寧で親切な対応をしている授業はやはり評価が高い。しかし、遠隔授業ではそのサービスには限界があると感じている。具体的には、質問に対する早い対応や、丁寧な動画作成、レポートへの個々のコメントといった授業を学生は求めている。先生方にはご負担をかけるが、学生に寄り添う授業を展開していただくようお願いしたい。

岡崎：次に、齊藤先生の報告で学生の授業の評価、学生のコミュニティ、学生の経済状況に触れたが、その中で授業について触れてみたい。学生の学修状況について、齊藤先生に教えていただきたい。

齊藤：アンケートから見ると、春学期は全てが遠隔授業であったので、学習を自宅で完結することができ、計画を立てやすかったと言えるのではないか。秋学期から一部で対面授業としたことから、対面授業を大学で受講した後、自宅に戻りそこからオンデマンドを受講する必要がでてきた。一貫性のない授業形態に、学習計画が大きく崩れることとなった。また、課題の多さや締め切りが集中することから、学生がどうしていいかわからなくなる状況となっている。締め切りが集中することに負担感を感じているが、期限を付けないと学生は計画を立てにくくなるという。期限があるからこそリマインダーが飛んでくるので計画を立てやすい。課題の出し方も、長文にまとめさせるレポート型でなく、Google Formを活用して穴埋め形式のアセスメントテストを課題とするなど、教員側の工夫も必要である。

新井：オンデマンド型授業になり学生はその内容を理解しているのかが不安である。特に、授業動画や資料を視聴しているのか疑問に思う時がある。春学期に担当した高齢者ケア論は 130 名が履修登録しておりハイフレックスで配信したが、実際、リアルタイムで参加するのは 25 名程度であったので、他の学生がオンデマンドで学習しているのかが不安である。しかし、課題を課すと 110 名程度が提出するので多くの学生がオンデマンド型授業を毎回受講しているのかもしれない。一方、課題を出しすぎると、学生は不満を漏らすし、大人数となると、課題の結果や質問に対する対応も難しくなる。サポートしてくれる TA などがいれば、もっと丁寧な対応が可能である。

岡崎：私も昨年度は 100 名以上の講義を 3 クラス担当した。大人数での授業の場合、質問や意見に対する個々の対応は難しいが、私の場合は、Google Classroom の質問コーナーにコメントを書いてもらい、授業内で多かった意見や授業に深く関連する意見を総括的に紹介し回答している。オンデマンド型授業に加え対面授業も再開したことから、授業の受講や課題に提出については、非常に複雑なスケジュールとなっているはずである。そのような状況で、学生に課題を課しても、時間を短縮するために動画教材を十分に見ずに回答している学生もいた。それでは学習効果は期待できないので、どうしても締め切りまでに提出が難しいのであれば、締め切りを過ぎて提出してもいいので、その場合は事前に連絡して欲しいと伝えている。このコロナ禍では、学生が助けを求められる環境づくりが必要だと考える。それでは次に、学生生活に目を向けて議論をしたい。先程、中嶋学生支援部長が、「コロナ禍の学生が心配だ」と言われたのは、具体的にはどのようなことを心配されているのか。

中嶋：やはり、自宅生活が長く、友達と馴染めない学生がいる。学生に友達はできたかと聞いても半数以上はできていないと言っている。課外活動に所属している学生は比較的友人ができやすいが、なかなか友達をつくりにくい環境であることは間違いないし、社交的ではない学生は、あえて輪に入ろうとしない学生もいる。先生方をお願いしたいのは、もし教室で、輪に溶け込めない学生に気づかれたら、どのような話でもいいので声をかけていただきたい。本学は学生と教職員との距離が近いと昔から言われてきたし私もそう思っている。やはり、学生と教職員との距離感を保ちながら学生を支援していくことが、本学の在り方だと考える。

岡崎：私も学生に声をかけることが大切だと考えている。次に、新井学生支援推進室長のご報告の中で先生の反省として、伸びしろを伸ばしきれなかったとのお話があったが、もう少し詳しくお聞かせ願いたい。

新井：実習の現場は、大学と福祉施設のスタッフが協働して学生を成長させる場である。実習前は福祉現場で働くことに不安を持っていた学生が、実習後は、福祉職に就きたいということを口にするといったような、将来への姿勢が大きく変化すること

が、伸びしろが伸びたことだと考えている。

岡崎：遠隔授業が始まって、デジタルホワイトボードといった新たな授業機材が導入されているが、今後、どのような展望があるのか。

吉川：遠隔授業、特にハイフレックス型を実施しやすいより良い環境を目指して、デジタルホワイトボードを順次導入していく。操作も簡単であるので、是非活用していただきたい。秋学期にハイフレックス型授業を検討している先生がおられたら、ご相談いただきたい。

岡崎：最後に、学生のアルバイトの雇用を含めた経済状況はどのようになっているのか。

中嶋：コンビニエンスストア等はコロナ前と雇用状況は変わらないが、飲食業は悪化していると聞いている。遠隔授業のメリットとして、定期代が節約できるといった意見もアンケートに多く見られた。斉藤先生の報告にもあったが、これからも経済状況の悪化は続くと考えている。奨学金制度やアルバイトの斡旋等の学生支援を検討していかなくてはならない。課題の負担に対する意見は秋学期も多く聞かれている。秋学期から対面授業とオンデマンド型授業の併用となり、勉学と課題、そしてアルバイトとの両立が難しくなっているであろう。先生方もこのような状況をご理解いただき、配慮や優しい声掛けをしていただきたい。

岡崎：経済的課題の話は、アルバイトや奨学金だけにとどまらず、学生支援の政策的課題でもあり、考えなければいけない時に来ている。また、授業手法についても、様々な世代の教員が集まり情報共有する必要がある。本日の研修は、あくまでもコロナの中で課題についてのイントロダクションである。まずは、このアンケートを学内の教職員の各立場で読んでいただき、何ができるのかを考えていただきたい。今回の続きとなるシリーズ2は、9月頃を予定しているが、次回は、学生を招いて生の意見を交えて議論を拡げたいと思っている。次回も是非ご参加いただきたい。

2021/06/30

2021(令和3)年度 佛教大学教員職員合同研修会
シリーズ1 「コロナ禍のなかの学生生活ー学生生活・遠隔授業・学生支援ー」

2020年度秋学期に学生が考えたこと
ー『2020年度秋学期コロナ禍での学生生活に関するアンケート』の振り返りー
～学生生活・遠隔授業・経済状況～

学生支援機構長
斉藤利彦（歴史学部）

1

はじめに

2

〈話題提供〉としてのアンケートの振り返り —その主旨—

- 『2020年度秋学期コロナ禍での学生生活に関するアンケート』を振り返り、その内容をもって話題提供とします。
- コロナ禍のなか、学生がどのようなことを考えたのか、または考えているのか、課題はなになのか、話題として提供できれば、と思います。
- これらの話題がFD・SDとして、先生方の学生指導や授業運営、職員のみなさんの日常業務のヒントにつながれば、と思います。
- さらに、これらが全学的に情報共有されて集合知を形成していくことができれば、とも思います。

3

アンケートの概要

- 『2020年度秋学期コロナ禍での学生生活に関するアンケート』。
- 学生支援課・教育推進課共催。
- 2021年3月13日～31日、Web上で実施。在学者から1154名の回答。
- 質問項目は17問。
- 回答選択項目 5段階評価。
- 「①かなり良くなった」「②少し良くなった」「③あまり変わらない」「④少し悪かった」「⑤かなり悪かった」
- それぞれの問いに、良い傾向・悪い傾向いずれかを回答選択した場合、その理由について〈自由記述欄〉を設け、定量と定性の調査がとられた。

本アンケートを検討するにあたり、ポジティブ度・ネガティブ度について、以下のように規定した。

①「かなり良くなった」「少し良くなった」合算値を、ポジティブ度（以下、P度と略）。

②「少し悪くなった」「かなり悪くなった」合算値を、ネガティブ度（以下、N度と略）。

4

アンケート設問項目一覧

- Q1 秋学期の学生生活について春学期と比較して、どのように感じていますか
- Q2 上記Q1で、「1かなり良くなった」「2少し良くなった」と回答した方のみ 良くなったと感じた理由を教えてください(自由記述)
- Q3 上記Q1で、「5かなり悪くなった」「4少し悪くなった」と回答した方のみ 悪くなったと感じた理由を教えてください(自由記述)
- Q4 上記Q3の内容を誰かに相談しましたか
- Q5 Q4で「はい」と回答した方 具体的な相談相手を教えてください(自由記述)
- Q6 Q4で「いいえ」と回答された方 相談しなかった理由を教えてください(自由記述)
- Q7 秋学期の経済状況について春学期と比較して、どのように感じていますか
- Q8 上記Q7で、「1かなり良くなった」「2少し良くなった」と回答した方のみ 良くなったと感じた理由を教えてください(自由記述)
- Q9 上記Q7で、「5かなり悪くなった」「4少し悪くなった」と回答した方のみ 悪くなったと感じた理由を教えてください(自由記述)
- Q10 経済状況の悪化に伴い、奨学金(大学独自・国や民間含む)を利用しましたか
- Q11 Q10で「はい」と回答された方 具体的な奨学金制度名称を教えてください(自由記述)
- Q12 Q10で「いいえ」と回答された方 奨学金制度を利用しなかった理由を教えてください(自由記述)
- Q13 秋学期の遠隔授業の授業方法について春学期と比較して、どのように感じていますか
- Q14 秋学期は春学期と比較して、授業外の学習時間(予習復習)は変わりましたか
- Q15 秋学期は春学期と比較して、遠隔授業で課される課題の量は変わりましたか
- Q16 秋学期の遠隔授業の成績評価について、どのように感じていますか。
- Q17 遠隔授業の良いところは何ですか？ また、お手本となるような遠隔授業があれば、その理由を含め教えてください。(自由記述)
- Q18 遠隔授業で困ったことは何ですか？ また、改善の必要があると思う遠隔授業があれば、その理由も含め教えてください。(自由記述)

5

2020年度秋学期 学生の学生生活に対する思い

6

2020年度秋学期に対する学生の思い

Q1「秋学期の学生生活について春学期と比較して、どのように感じますか」

①かなり良くなった	②少し良くなった	③あまり変わらない	④少し悪くなった	⑤かなり悪くなった	合計
141	363	532	95	23	1154
12.2%	31.5%	46.1%	8.2%	2.0%	100%

春学期と比較して秋学期はどうであったか、という設問に対し、「③あまり変わらない」が**46.1%で最上位**。

つづいて、「②少し良くなった」31.5%、ついで「①かなり良くなった」12.1%。

肯定的評価が上位2、3位。**P度は43.7ポイント**。

一方、悪化したと考えた学生は「④少し悪くなった」8.2%、「⑤かなり悪くなった」2.0%。

N度は10.2ポイント。

〈参考1〉

第56回『学生生活実態調査』（全国大学生生活協同組合連合会 2020年/10～11月実施 回答数11,028人）

学生の学生生活〈充実度〉74.2%（前回比－14.6ポイント）

1年生56.5%（前回比－32.9ポイント 83年以降最低値）

〈参考2〉『学生生活実態調査』にみる本学学生の充実度の変遷

2013年調査68.4p・2015年調査67.6p・2017年調査67.2p・2019年調査68.5p

コア層としての「③あまり変わらない」学生たち

- 「③あまり変わらない」がコア層を形成。



- 秋学期期間もコロナ禍の収束が見通せなかった点。
- 社会生活・学生生活への制限が継続した点。
- このことが、学生生活が「あまり変わらない」と評価した理由と推測。

学生生活が悪くなったと考えた理由

—Q2の自由記述から—

- 「①かなり良くなった」「②少し良くなった」と回答した学生への自由記述回答。

• 〈対面授業が再開〉されたことを理由とする言説が圧倒的に多い。

では、学生は〈対面授業の再開〉のなにを評価しているのか、なにが好転したと考えたのか？

- ①対面授業再開による友人との交流・教員との交流といった人的交流の復活。
- ②ゼミや実習系科目が対面授業として再開。

- 学生が学習成果だけでなく、学生生活をいかに大切にしているかがうかがえる。
- 学生はゼミや実習系科目は対面授業形態のほうが学習成果はあがると考えていることがうかがえる。

9

学生生活が悪くなったと考えた理由①

—Q3の自由記述から—

- 〈ハイブリッド型授業による日常への負担が増加〉といった内容の記述が多い。

授業をめぐるスケジュール管理が難しい、と考えている傾向。

- 登校して対面授業を受講。帰宅後、遠隔授業のオンデマンド動画教材を視聴し、提示された課題に取り組む、というスケジュール管理が難しく負担が増している、と考えている模様。

10

学生生活が悪くなったと考えた理由② —Q3の自由記述から—

〈生活リズムが整えられない〉という声も散見。

- ・ コロナ禍の学生生活において、生活リズムを整えることができないことを理由とする体調不良は、大学生の健康管理を考えるうえで重要な論点。
- ・ 〈遠隔授業と学生の生活リズムの乱れ〉に関する全国的調査は、管見のかぎり見当たらない。
- ・ 各大学において、〈遠隔授業と学生の生活リズム〉に関しては、さまざまな取り組みがなされている。

本学の取り組み例

- ・ 学生支援課のさまざまな取り組み
- ・ 学生相談センターの「こころの健康情報」の配信
- ・ 健康管理センターの「健康状態自己管理表（新型コロナウイルス専用）」

〈参考〉

学生相談センターの第3回『学生生活アンケート』（母数179名）内「感染拡大の影響を受けて、生活が乱れたと感じますか？」

「はい」83%、「いいえ」17%

生活が乱れた点上位3位①「運動不足」②「気分が落ち込むようになった」③「昼夜逆転した」

11

秋学期学生生活に対する相談先

- ・ 学生生活が〈悪化した〉と考えた学生の相談先の多くが**友人**。
- ・ 同程度に、「親」・「母親」・「両親」・「家族」という回答。
⇒ **保護者が学生の学生生活や遠隔授業の悩みや思いを見聞きしていることは留意すべき。**

相談しなかった学生の理由

- ・ 「必要がない」「理由がない」「自分だけではない」という、諦観にも似た理由が多い。

- ・ 「相談先が浮かばなかった」という声も多い。
- ・ 学生に対し、学生支援課「なんでも相談窓口」の周知を、より進めていく必要。

12

2020年度秋学期 遠隔授業に対する学生の考え

13

秋学期遠隔授業に対する評価について

Q13「秋学期の遠隔授業の授業方法について春学期と比較して、どのように感じていますか」

①かなり良くなった	②少し良くなった	③あまり変わらない	④少し悪くなった	⑤かなり悪くなった	⑥遠隔授業を受講していない	合計
83	319	528	73	19	132	1154
7.2%	27.6%	45.8%	6.3%	1.6%	11.4%	100%

Q14「秋学期は春学期と比較して、授業外の学習時間（予習復習）は変わりましたか」

①かなり良くなった	②少し良くなった	③あまり変わらない	④少し悪くなった	⑤かなり悪くなった	⑥遠隔授業を受講していない	合計
101	283	524	96	43	107	1154
8.8%	24.5%	45.4%	8.3%	3.7%	9.3%	100%

Q15「秋学期は春学期と比較して、遠隔授業で課される課題の量は変わりましたか」

①かなり増えた	②少し増えた	③あまり変わらない	④少し減った	⑤かなり減った	⑥遠隔授業を受講していない	合計
105	213	517	163	35	121	1154
9.1%	18.5%	44.8%	14.1%	3.0%	10.5%	100%

Q16「秋学期の遠隔授業の成績評価について、どのように感じていますか」

①自分が考えていたよりかなり評価が良かった	②自分が考えていたより少し評価が良かった	③おおよそ考えていた通り	④自分が考えていたより少し評価が悪かった	⑤自分が考えていたよりかなり厳しい	⑥遠隔授業を受講していない	合計
102	255	497	146	29	125	1154
8.8%	22.1%	43.1%	12.0%	2.5%	10.8%	100%

14

「あまり変わらなかった」秋学期の遠隔授業

Q13「秋学期の遠隔授業の授業方法について春学期と比較して、どのように感じていますか」

①かなり良くなった	②少し良くなった	③あまり変わらない	④少し悪くなった	⑤かなり悪くなった	⑥遠隔授業を受講していない	合計
83	319	528	73	19	132	1154
7.2%	27.6%	45.8%	6.3%	1.6%	11.4%	100%

春学期の遠隔授業と「あまり変わらない」45.8%と、コア層を形成。

混乱もみられた春学期の遠隔授業の内容とあまり変わらない、という評価が半数近く。

遠隔授業が良くなったと考えたP度は34.8ポイント。

一定の評価はなされている、と考えたいところ。しかし、あまり安心できるスコアとはいえないだろう。

秋学期は教員も遠隔授業のノウハウを蓄積し一定の成果をあげたといえるが、学生は必ずしもそうとは受け止めていないのではないか。

15

自由記述にみる遠隔授業を評価した理由

• 遠隔授業、とりわけ、オンデマンド教材の視聴による学習形態に対し、好意的言動を寄せる言説を多く確認できる。

• 「自分のペース」「自分のタイミング」「自分の都合のよい時間」「好きな時間」といった記述の多さ。

• 「何度も見直せる」・「何度も復習できる」・「聞き逃したら戻れる」・「繰り返し見られる」という記述の多さ。



• 自身のペース・タイミングで授業内容を理解できるまで視聴できる、オンデマンド授業の利点を、学生も理解している/しはじめている、といえるのでは。

16

自由記述にみる遠隔授業を評価しない理由

- ・〈ハイブリッド型授業はスケジュール管理が難しい〉といった内容の記述が多い。
- ・学生生活が悪化した、と考えている学生と同じ理由。

- ・対面授業・遠隔授業（リアルタイムのオンライン授業/オンデマンド授業）といったハイブリッド型授業の形態だと、スケジュール管理（動画教材視聴のスケジュール管理・課題の提出・課題締め切り管理など）が難しい、と考えている。



- ・課題量が授業によってマチマチであることへのとまどい・課題量の多い科目の対応によって、その他の科目を受講する余裕がとぼしくなる、といった声。
- ・週に数コマ、オンデマンド授業があった場合、課題への取り組みなどの負担は、春学期と変わらない、あるいはそれ以上、と考えている、ような記述。
- ・課題の期限設定の問題（期限がある/期限がない どちらも満たされない）。

17

秋学期、課題は増えたのか？

Q15 「秋学期は春学期と比較して、遠隔授業で課される課題の量は変わりましたか」

①かなり増えた	②少し増えた	③あまり変わらない	④少し減った	⑤かなり減った	⑥遠隔授業を受講していない	合計
105	213	517	163	35	121	1154
9.1%	18.5%	44.8%	14.1%	3.0%	10.5%	100%

自由記述をみると、**課題量の多さ**への不満も寄せられている。

- ・しかし、定量的には「あまり変わらない」が44.8%とコア層。
- ・「かなり増えた」9.1%・「少し増えた」18.5%。
- ・増加した、という回答の合算値は**27.6ポイント**。
- ・約3割の学生が課題量は増加した、と考えている。

〈参考〉

「課題地獄」という用語

2020年8月以降、遠隔授業における課題量でひっ迫した学生たちから生まれた学生用語「課題地獄」がマスコミなどで取り上げられ、社会問題化した。

1コマ400～800字の課題は過度な量とはいえないだろうが、1日に3コマとなると、週12本前後の課題に取り組みなくてはいけないこととなる。締め切りも科目によってマチマチ、場合によっては、締め切りが集中することもあり、学生たちはSNSでその状況を「課題地獄」と称したのであった。

参考文献

堀和世「オンライン授業で大学が変わる～コロナ禍で生まれた「教育」のインフレーション～」（大空出版 2021年3月）

18

自由記述にみる質問への返答を欲する学生

- 学生は質問や問い合わせに対する教員のレスポンスの遅さ/無さに、不満を多く寄せている。
- 「課題を出しっぱなし」・「課題の返却時にコメントも添削もない」ことへの不満も寄せられている。

- 春学期にも多く指摘された教員のレスポンス問題は、秋学期も変わらずに存在。

- 遠隔授業やGoogle classroomといったLMSを用いた授業。
- 学生は多人数での受講という感覚に加え、教員と個々でつながっている感覚もあるのでは。

19

秋学期の遠隔授業の成績評価について

Q16「秋学期の遠隔授業の成績評価について、どのように感じていますか」

①自分が考えていたよりかなり評価が良かった	②自分が考えていたより少し評価が良かった	③おおよそ考えていた通り	④自分が考えていたより少し評価が悪かった	⑤自分が考えていたよりかなり厳しい	⑥遠隔授業を受講していない	合計
102	255	497	146	29	125	1154
8.8%	22.1%	43.1%	12.7%	2.5%	10.8%	100%

秋学期の成績評価は予想していた成績通りと考えた学生が約4割。

- かなり良かった・少し良かった合算値**30.9ポイント**。
- 手ごたえ以上の成績となった学生も加えると、約7割の学生が成績に一定の満足をしめしているのではないか。
- しかし、1割強の学生が思っていた以上に成績が振るわなかったと思っている。

〈参考〉
2020年度秋学期
GPA中央値：2.75
現在の2,3年生が対象。

20

遠隔授業をめぐる二極化する学生

- 遠隔授業のよし悪しだけでない。

- 対面授業を望む学生とともに、遠隔授業の継続を望む学生も一定数存在する。

- 今後は、対面授業と同時配信していく、ハイフレックス型の授業形態を、より充実させていくべきではないか。

- 教室の施設整備という問題点。

- しかし、教員がノートPCを駆使すると、一定レベルのハイフレックス型は実現できる、といわれている。

- ノートPC2台
- ノートPC1台とiPad
- ノートPC1台とスマホ

+

〈Zoom〉

この組み合わせによって可能、とされる。

- そのノウハウなどは教育推進課などで提唱されていることを期待。

〈参考〉

「【学生の意見割れる】Web・併用・対面、それぞれに拒否感《本紙調査》(2020年8月19日)」『立命館大学新聞』立命館大学新聞社
<https://ritsumeikanunpress.com/08/19/4888/>

「秋学期の授業について最も希望する形態」

〈全面Web授業〉 34.4%

〈Web授業と対面授業の併用〉 35.1%

〈全面对面〉 26.7%

〈参考文献〉村上正行「コロナ禍における大学でのオンライン授業の実情と課題」
 (『現代思想 特集 コロナ時代の大学』48-14 2021年10月)



ハイフレックス型の授業のイメージ図 (京都大学HP参照)

21

2020年度秋学期 学生の経済状況について

22

秋学期経済状況に関して

Q7「秋学期の経済状況について春学期と比較して、どのように感じていますか」

①かなり良くなった	②少し良くなった	③あまり変わらない	④少し悪くなった	⑤かなり悪くなった	合計
20	100	841	149	44	11544
1.7%	8.7%	72.9%	12.9%	3.8%	100%

アンケート実施後、約半年。状況は相当に変化していると、といえる。

- 「あまり変わらない」が約7割を占め、大きな状況変容が生じていないように見える。
- しかし、程度の差はあれ、悪化したと考えている学生の合算値は16.7ポイント。
- 「アルバイトができるようになった」「アルバイトのシフトを多く入れることが可能になった」、という多くの言説。
- 「コロナ禍のなかでアルバイトが減った」「シフトに入れなくなった」、という多くの言説。
- アルバイトをめぐる二極化する学生。

コロナ禍における全国の大学生とアルバイトの状況

株式会社マイナビ 2021年2月「2022年卒 マイナビ大学生のライフスタイル調査 前編 ~with コロナで学生生活はどう変わったか」

「定期的なアルバイトをしている」と回答した学生の1ヶ月の収入平均は4万2,195円（前年比-4,056円）。
「定期的なアルバイトをしていない」と回答した学生は5,743円（前年比-2,169円）。

定期的なアルバイトをしていない学生のほうが減収割合が大きい。政府からの休業、時短営業要請、外出自粛・三密対策での催事中止などの影響を受け、日払いや短期間のアルバイトの募集自体が減少したため。

第56回『学生生活実態調査』（全国大学生生活協同組合連合会）

収入・支出とも大きく減少。
アルバイト収入の減少。
自宅生：4,660円減（1か月）
下宿生：7,240円減（1か月）

奨学金利用に関する回答

アンケート実施後、約半年。状況は相当に変化していると、といえる。

- 悪化したと回答した学生の約2割が何かしらの奨学金を利用している。
- 一方、約8割の学生は奨学金などを利用していない。
- 自由記述で確認すると、日本学生支援機構の奨学金が大半。
- ついで、本学のコロナウイルス関連の緊急奨学金、育英奨学金などがあげられている。
- 「いいえ」と回答した学生の理由は、多種多様な理由。
- 〈すでに奨学金の貸与を受けている〉ことを理由にしているのが目立つといえるだろうか。
- 加えて、悪化したとはいえ、まだ奨学金を貸与するほどの悪化ではない、と考えている声も比較的多い。

Q10経済状況の悪化に伴い、奨学金（大学独自・国や民間を含む）を利用しましたか

①はい	②いいえ	合計
142	548	690
20.6%	79.4%	100%

今年度

高等教育無償化の修学支援制度利用学生の増加傾向

教職員互助会の新型コロナウイルス対策緊急奨学金の申し込みの状況

学生の経済状況は悪化する傾向を示し始めている、と考えられる。

アンケート結果から 考えてみる学生支援について

25

アンケート結果から考える学生支援 — 学生生活に関して —

• 学生は学生生活、とりわけ、**友人や教員との交流を大切にしている。**

• 学生は授業に対し、学習成果だけでなく、**学生生活環境を重視**している。

• **コロナ禍における〈学生生活〉を有意義にする方策を全学的に検討する必要。**

コロナ禍のなかの課外活動の推進

コロナ禍のなか、さまざまな制約はあるが、課外活動を推進していく必要。
現在、例年と比較して新入部員が集まらない。数年後、多くの団体で存続の危機が生じる可能性。

2年生問題への対処を考えていく必要性

コロナ禍のなか、1年生時に、十分な学生コミュニティ（友人関係）が形成されていない/しきれていない/できていない

〈参考〉

第56回『学生生活実態調査』

「友だちができない/いないことが気にかかっている」
1年生（現2年生）は3人に1人、という結果。

26

〈参考〉 2年生問題について —履修と成績不振をめぐって—

- 学生支援機構・学生支援課は暫定基準を設けたうえ、学科ごとに成績不振学生を抽出。
- 学生支援担当主任を通じ、学部学科に提供(6/23付連絡・配布開始)。

成績不振学生の傾向

- 履修状況が混乱している。
- 履修登録を理解できているのか、というような履修状況。

履修登録から、卒業要件を意識しているのか、という学生の存在。

低単位の学生が卒業要件単位数が滞っているにも関わらず、多数の自由科目を登録している学生の存在。

- 履修状況から考えると、履修・卒業要件・卒業所要単位・開講形態・再履修などの理解が浅い学生。
- 学修上、深刻な履修状況に陥っているのでは、と考えられる。
- **学生コミュニティ(友人関係)が形成されていない**ことから、学生同士の相談や声かけなどが無いのでは。
- 自らの誤解や思い込み、理解の深度を確認できず、ひとり合点で履修してしまっているのでは。
- 今後のリカバリーのために、ガイダンス・ガイダンス資料・履修指導が重要になる、と考える。

27

アンケート結果から考える学生支援 —学生生活に関して—

- コロナ禍のなか、学生の心身の健康管理は大きな課題。

- コロナ禍における学生の生活や健康に関わる支援を強化していく必要。**学生支援課の試みのひとつ**

- 日本財団 第35回『18歳意識調査』(2021年3月25日発表)
- 「オンライン授業などで通常とは異なる学校生活」71.3%がストレスを感じている、という結果。
- 順天堂大学「コロナ禍の大学生の体格・体力・スポーツ活動に伴う生活の変化」の全学的調査。
- 「60%以上の学生が筋力と持久力の低下」を実感している、という結果。
- 第56回『学生生活実態調査』(全国大学生生活協同組合連合会)では、**コロナ禍のなか、増加傾向にあった朝食兼用食事が、さらなる増加傾向にある、という結果。**

〈参考〉

『佛教大学学生生活実態調査 2019』「本学学生の毎日朝食を摂る」66.3%「ほとんど摂らない」は16.7%

- 佛教大学教育後援会も2021年度事業として、学生生活援助のひとつ「食育支援」を、従来の朝食にかぎらないかたちで拡大する予定、とのこと。



学生支援課の試みのひとつである食育支援事業「BUランチ」 28

アンケートから考える学生支援 — 学生支援としての遠隔授業① —

学生は遠隔授業、とりわけ、オンデマンド授業の利点を把握しはじめているのでは。

教育コンテンツとしてのオンデマンド動画教材の充実を図る必要。

With Online時代：学生の安心・安全と学習の保障が求められる時代

(参考文献)
「休校を機にハイブリッド授業が常態化“文房具の拡張”としてのICT」(『月刊先端教育 大特集GIGAスクール元年 オンライン教育』4月号 2021/04)

- ・デジタルホワイトボードの活用推進 (学務課)
- ・動画撮影スタジオの整備 (生涯学習部メディア教材課)



コンテンツ作りのための環境は整備されつつある。

・保護者もテレワークを経験。オンラインを利用する授業への抵抗感がさほどはなくなっているとも。

・学校に対しオンライン授業の充実を、さらに求める可能性があることを念頭のおく必要があるのでは。
学生相談先が親や両親といった保護者も多いという自由記述回答の存在。

参考文献 堀田龍也他4人『学校アップデート 情報化に対応した整備のための手引き』(さくら社、2020/5) 石戸奈々字編『日本のオンライン教育最前線 アフターコロナの学びを考える』(明石書店、2020/10) 西川純暉『子どもが「学び合う」オンライン授業』学陽書房 2020/07

・GIGAスクール元年。初等・中等教育におけるICT教育の普及と運用

・学習塾のオンライン化の展開

⇒ ICT教育が通常ともいえる児童・生徒たち

・本学：2022年度より新入生のノートパソコンの必携化



対面授業が主となる時期がきても、今後はICTを組み込んだ授業展開が望まれるようになるのではないかと。

29

アンケートから考える学生支援 — 学生支援としての遠隔授業② —

- ・障がい学生の遠隔授業受講に対し、その学習環境を整備する必要。
- ・障がい学生への遠隔授業受講に対する支援を促進していくべき。

- ・リアルタイムのオンライン授業の運営方法。
- ・オンデマンド教材の内容。

〈参考〉

大学コンソーシアム京都は「オンライン講義における合理的配慮に取り組む上での参考情報について」をHP上にアップしている。

本学HP上「FD・SDへの取り組み」のなかにも同内容をアップしている。

- ・障がい学生支援の観点からの教材などの作成マニュアル、授業運営のヒント集の配布 (HP上のアップロード) を、近々予定。

- ・学生支援課の障がい学生支援の専門員の方々の尽力。

30

アンケートから考える学生支援 ー経済状況ー

- 今年度にはいり、学生の経済状況は悪化しはじめていると考えられる。
- 引き続き、各種の奨学金体制の維持、場合によっては拡充も必要になるのでは。
- 個別状況にも留意する必要。

31

おわりに

32

おわりに

- 『2020年度秋学期コロナ禍での学生生活に関するアンケート』の振り返りを行いました。
- 今後の学生指導や授業運営、種々の業務のヒントになれば、大変幸いに存じます。
- ありがとうございました。

秋学期の授業で考えたこと －社会福祉学部を例にして－

新井康友（学生支援推進室長 社会福祉学部准教授）

1

私の担当科目

- ▶ 「老人福祉論A」（履修登録者数：148名）
- ▶ 「社会福祉学演習4A」（履修登録者数：13名）
- ▶ 「社会福祉援助技術現場実習指導3A」
（履修登録者数：5名）

2

オンデマンド授業について

- ▶ 学生の私語がないので、私のペースで授業ができた。
→ 学生へ質問することなく、一方通行の授業になった。
- ▶ 学生の雰囲気（受講態度など）が分からなかった。
- ▶ 学生の理解度を把握できず、試験の評価が甘くなった。
→ 小テストを実施すべきだった。

3

リアルタイム授業について

- ▶ 画面を通してだと、学生の特性などが分からないまま、実習に送り出した。
- ▶ 表面的な話ばかりで、何を考えているか分からなかった。
- ▶ グループスーパービジョンにならなかった。
- ▶ 学生同士の盛り上がりはなかった。

4

遠隔授業の限界について

- ▶ 学生との関わりが少なくなった。
- ▶ 学生の伸びしろを伸ばせなかった。
- ▶ 社会福祉士の合格率の低下。

5

学生支援担当主任（2020年度）として

- ▶ 2019年度に比べ、履修相談、資格取得の相談が激減した。
→問題が潜在化した。
- ▶ メールでの相談ばかりで、当たり障りのない返答になった。
- ▶ 他の教員から、休みがちの学生の相談・報告を受けるが、他の講義の出席状況などが把握できず、支援に行き詰った。

6

学生の状況について

- ▶ 学生同士の繋がりが薄い・ない。
 - 資格必修科目の課題が未提出だった。
 - そもそも履修登録ができていなかった。
- ▶ 課題提示型授業による自学自習が苦手、できない学生がいた。
- ▶ 質問してこない。でも積極的な学生もいる。
- ▶ 1年生（現2年生）が大学での友達がいないことを気にしていた。

7

佛教大学教員職員合同研修

〔シリーズⅡ〕 学生支援の新たな地平を探る—学生の声をもとに—

実施方法：Zoom・オンデマンド動画配信

実施期間：Zoom 2021年9月29日（水） 16：30～18：00

オンデマンド 2021年10月11日（月）～2021年11月5日（金）

講師：斉藤 利彦（学生支援機構長）

岡崎 祐司（教育推進機構長）

新井 康友（学生支援推進室長）

学生 4名

岡崎教育推進機構長より、研修会の目的について、学生がコロナ禍にどのように感じているか、どこに困難を感じているのかについて学生の声を直接聞くことにより、学生支援に活かしていくこととの説明があった。続いて、斉藤学生支援機構長による、長期化するコロナ禍が学生に与える影響の報告と、4人の学生を招きコロナ禍での生活について、直接話を聞いた。

◆報告

「コロナ禍の長期化と学生」

発表者：斉藤 利彦（学生支援機構長）

今回は6月に開催した教員職員合同研修会「〔シリーズⅠ〕 コロナ禍の中の学生生活—学生生活・遠隔授業・学生支援—」の内容もふまえながら、今後の学生支援を学生の声から考えるという趣旨とし、全国の学生がどのような状況にあるかを各種調査を基に話された。

コロナウイルス感染症により、これまでの週間や生活規範は通用しなくなり、また、「ハレとケ」の消失ともいえる日常と非日常のあいまい化が進んでいる。東京工業大学保健管理センターカウンセリングチームはコロナ禍を「ゆるやかに 長期間 世界規模で進展する災害」と提唱しており、我々もそのような災害の中で学生支援をしているという共通認識を持つ必要があるのではないかと。家庭生活や学校生活、対人関係で長期にわたって制限を受け、生活体験や社会体験の欠如、所属意識の低下、学年歴の希薄化が学生に不安を引き起こし、キャンパス不適應につながることもある。症状が出るのは身体、心、行動と人によって様々であるが、学生の変化を見つけた場合には、こちらから働きかけることが重要である。そして、時間差で心の病が出てくるだろうという予測もある。現在また将来に起こりうる事態も念頭に、新たな学生支援への志向の必要性を訴えられた。

対面でのコミュニケーションが難しい状況ではあるが、だからこそより学生の声に耳を傾け、学生が思っていることや感じていることを把握しようという姿勢や体制づくりにまず取り組むべきだと感じた。

◆学生とのディスカッション

学生 4 名：

歴史文化学科 3 年生（以下、学生 A）

教育学科 1 年生（以下、学生 B）

現代社会学科 1 年生（以下、学生 C）

社会福祉学科 2 年生（以下、学生 D）

進行：斉藤 利彦（学生支援機構長）

新井 康友（学生支援推進室長）

斉 藤：この 2021 年春学期はどのような状況でしたか。

学生 A：春学期は 6 割がオンライン、4 割が対面で、大学へは週に 4 回通っていました。

学生 D：陸上部に所属しています。春学期はほとんどがオンラインだったため、授業目的で大学に来ることありませんでしたが、陸上部の活動で、週に 4 日ほどは大学へ来ていました。

学生 B：はじめは対面授業が多かったんですが、だんだんと遠隔授業が増えていきました。（遠隔授業では）パソコンに不慣れで課題提出など時間がかかりましたが、徐々に慣れていきました。遠隔授業でも、他の学生と話す機会が持てたことが良かったです。

学生 C：春学期はほとんどが遠隔授業でした。授業と部活動で週に 2、3 回大学へは来ていました。大学生活にまだ不慣れで不安ですが、秋学期はもう少し大学に来たいです。

斉 藤：A さん、オンデマンド型授業で良かった点はありますか。

学生 A：体調不良などで授業を休んでも、後で授業内容を確認できるのはいいと思いました。

斉 藤：B さん、オンデマンドとリアルタイムどちらが多かったですか

学生 B：半々くらいだったと思います。グループワークなどが無い授業は、自分のペースで学習が進められるので、オンデマンド動画もいいと思いました。

学生 C：同じ日に対面授業とリアルタイムの配信が続くと、移動や受講場所の確保が大変ですが、オンデマンドだと好きなタイミングで受講できるのは良いと思います。

斉 藤：D さんは、対面とリアルタイムの遠隔授業の組み合わせで苦労した点はありますか。

学生 D：遠隔授業のグループワークでは毎回グループが違ったり、かつ参加している学生が顔が見えないと、うまく話せないことがあります。私が受けていた授業は毎回のグループが固定されていて、グループ内の仲を深めることができました。オンデマンドの方が予定も立てやすく、個人的には良かったです。昼間の時間にボランティア行って他の人と交流を深めたり、コロナ禍だからできる時間の使い方だと思います。

斉 藤：1 本の動画は何分くらいなら、集中力が続きやすいですか。

学生 A：20～30 分くらいだと思います。

学生 C：僕も 30 分前後くらいだと、集中して取り組みやすいと思います。

学生 B：30 分前後であれば、すぐに取り掛かれます。

学生 D：20～30 分程度のほうが、「やってみようかな」という気になり、空いた時間に取り組みやすいです。大学の授業が片手間のように聞こえますが、90 分 1 本よりも、20、30 分の方が集中できます。

齊 藤：課題も多いと思いますが、どうでしたか。順調にこなせましたか。

学生 B：いくつかの授業で提出期限が重なった時は大変でした。提出まで 1、2 週間の期限があれば、自分で計画を立てて取り組むことができると思います。

学生 C：Google Classroom で通知が来るので、それで課題を管理していました。私も提出まで 1、2 週間あるとちょうど良いと思います。

学生 A：1、2 週間あると余裕をもって作成できます。

齊 藤：C さんが Google Classroom で確認をしながらと言っていましたが、どのようなことでしょうか。

学生 C：Google の to do リストで管理しています。(みなうなずく)

学生 D：to do の通知によって気づいた課題もいくつかありました。

学生 A：to do リストに課題の一覧が出るので、それを見ながら優先順位を決めてやりました。

齊 藤：学生のみなさんはそのように使用しているんですね。教員はあまり意識していないかもしれないが、教員も意識して、課題を出すときには to do リスト使用していったほうがいいですね。

齊 藤：コロナ禍で学生の皆さんの経済状況が悪化していると聞いていますが、アルバイトの状況を聞いていきたいと思います。ここからは学生支援推進室長の新 井先生をお願いします。

新 井：みなさんはアルバイトしていますか。アルバイトをしている場合、コロナ禍でどのような状況になっていますか。

学生 A：私は 2 つ掛け持ちしています。一つは主に観光客向けの飲食店と、もう一つテイクアウト専門の弁当販売です。飲食店は 1 年生の 4 月からしていて週に 2 日ほど、お弁当販売店では 2 年生の秋から始めて、現在は週に 3 回ほど働いています。私は地方出身で下宿しており、奨学金も借りていますが、家賃や生活費をアルバイトで賄っています。コロナ禍によって雇用条件の悪化を、身を持って経験しました。飲食店は 2020 年 4～6 月まで休業、8 月からのアルバイト再開後も客が少ない為、シフトの削減がありました。

新 井：それではコロナにより収入は減りましたか。

学生 A：飲食店は、完全に収入が 0 になった月もありました。そのため、他のアルバイトを探し、2 つ掛け持ちすることになりました。

新 井：Dさんはどうですか？

学生 D：塾の講師と中学校の有償ボランティアをされていて、コロナによって直接的にシフトが減ったことはありません。ただ、中学校を通じてコロナ感染者発生のお話を聞くなど、コロナと隣り合わせだと感じることはありました。また、飲食店でアルバイトをしている友人の中にはコロナでシフトが減ったという話はよく耳にしました。なので、コロナが原因で収入が減った学生は多いのではと感じています。

新 井：Dさんはあまり影響はなかったが、周りの友人では影響があったということですね。塾は密になったりしないんですか。

学生 D：オンラインの塾だったので、それはありませんでした。コロナで対面を避けたいということで、入塾する人は増えていたように思います。

新 井：なるほど。Bさんはどうですか。

学生 B：アルバイトしていません。今後はしたいと思っています。

新 井：Cさんはどうですか。

学生 C：飲食店でしています。今年の4月から始めたのでコロナ前と比較はできませんが、希望したシフトの半分くらいしか入れないです。店は感染対策をしっかりとしますが、感染への恐怖はあります。

新 井：飲食店でコロナ対策をしっかりとしているといっても、やはり心配ですね。では続いて、アルバイトはどのように探しているか教えてください。

学生 A：私は主にスマホのバイトあっせんアプリを複数利用して探しています。私の周りではアプリを使っている人が多いです。

学生 C：私は友人の紹介ですが、周りではアプリも利用している人はいました。

新 井：Bさんはこれからアルバイト先を探すにあたり、大学へ希望するサポートはありますか。

学生 B：私は地方出身で京都のことがよくわからないので、大学から紹介があると安心して利用できるかと思っています。

新 井：やっぱり大学からの紹介だと安心できるんですね。ここからは学生生活についてお聞きします。斉藤先生お願いします。

斉 藤：アンケートなどから特に1、2年生の交友関係が難しいという結果も出ていますが、どうでしょうか。

学生 B：春学期に少人数の授業が対面だったので、そこで友人を作ることができました。

学生 C：私は授業やサークルで大学へ来ており友人はできましたが、対面授業もなく、サークルにも入っていない人もいたので、そういう人は苦しいものがあったのではないかと思います。

斉 藤：1、2年生のLINE世代はSNSでつながっているといますが、実際はどう感じていますか。

学生 D：私は入学した時から遠隔授業となり、対面授業が全くない状態だったので、初めに

できた友人は去年の春学期にオンラインの授業で話すようになり LINE の交換をしました。去年の秋学期の対面授業の時に会いました。今年の春はほぼオンライン授業だったので、できた友達はほとんどいません。

齊 藤：3年生のAさんはどうですか。鷹陵祭（※学園祭）実行委員をされていて、下の学年を見て感じるなどありますか。

学生A：低学年で鷹陵祭実行委員になる理由が、友達作りとか、大学に来る機会を増やしたいというものが多かったです。対面で友人を作ることが大事なんだと感じました。

齊 藤：フェイストゥフェイスというのが友達づくりの第一歩として大事ということですね。オンライン交流会をしている大学も増えていますが、そういった交流会があれば参加したいと思いますか、また、規模はどれくらいがいいと思いますか。

学生A：実行委員でも交流を深めるためにオンラインの交流会を開きましたが、人数が多いとうまくいきませんでした。10～20名以下であれば、発言しやすくうまくいくのではと思います。

学生D：あればぜひ参加してみたい。例えば同じ学科の中で教員をめざしている人などでできれば、社会福祉学科では資格ごとに授業が分かれていくので、授業も重なり、採用試験の勉強もできてすごくいいのではないかと思います。

学生C：SNSだと文面での会話となって、顔が見えません。Zoomだと顔が見えるので、遊びに行くなど次につながる可能性が高くなるのでは。

齊 藤：LINEなどの文面だけでなく、顔を知り、会話をするのが大事だということですね。Bさんはどうですか。

学生B：大人数だったり、初対面の人の集まりだと話がなかなかはずまないの、話を進めてくれる人がいれば参加したいと思う。

齊 藤：ファシリテーターのような人がいると参加しやすいということですね。オンラインの交流会は最大20人くらい、そのうえで教員などが入って話を回してくれるような状況であれば、参加しやすいということですね。

もし、授業でグループワークでの友達づくりの参考例などあれば教えてください。

学生C：通常はカメラとマイクはオフだが、グループワークの時だけオンにする授業があり、そういった方が顔が見えて交流がしやすいと思いました。

学生B：授業の最初で同じクラスの子とLINEを交換し、その授業でわからないことがあれば相談しあえるような関係になりました。

学生D：ゼミの場合なんですけど、授業の前に自己紹介や雑談などする時間がしっかりあり、そこである程度お互いを知ってからグループワークだったので良かったです。そういうものがなく、いきなりグループ分けして仲良くなるのは難しいと思います。授業の前に交流する時間が設けられていたのは良かったです。

齊 藤：教員の授業の持っていく方で交流する機会ができることもあるんですね。Aさんはどうですか。

学生 A：私は 1 年生の時はコロナ前の対面授業だったんですが、1 年間遠隔授業で会えていなかった人たちと今年対面授業のフィールドワークをして仲よくなりました。

齊 藤：校友問題はとても重要な問題ですが、授業方法の工夫によって、つながりを作っていけることがわかりました。ここからは新井先生お願いします。

新 井：次はこういったサポートがあれば大学生活が充実するなど具体的な要望があれば、教えてもらえますか。

学生 A：これまでで良かった取り組みは、食堂でご飯を提供してもらったことです。友達と行ってみようかという話になりました。

授業の話でいえば、シラバスに同時双方向型かオンデマンド型か書いてもらえると履修計画が立てやすいです。

学生 D：Zoom の授業の同時双方向型の場合、先生は 1：40 人という感覚で授業をされているかもしれないですが、学生は 1：1 のように感じていて、それが複数あるというイメージになりがちです。学生のつながりのアシストを先生にしてもらえるとありがたいです。また、アルバイトでいうと、学校ボランティアの募集など大学に掲示していますが、大学に来ないので、メールなどでも募集すれば、興味のある学生が参加することができ、コロナの中でも自分ができることを探す学生が増えるのではないのでしょうか。

学生 B：PC の操作で相談窓口があってとても助かりました。そのように困ったときに気軽に相談できる窓口があるといいなと思います。

学生 C：授業や課題に関する質問を Google Classroom やメールでもタイムラグがあるので、早く伝わるシステムが欲しいです。

新 井：ありがとうございます。率直な意見をいただきました。最後に、コロナが収束したらこういったことをしたいという夢などありますか。

学生 A：鷹陵祭実行委員が 100 名以上いるので、顔を合わせて活動をしたいです。個人的には地方出身なので、京都やその周辺を観光したいですね。

学生 D：学食でみんなでごはんを食べて、授業に出たり、合宿にいたり、旅行にいたりしてみたい。思い切り大学生を感じられる生活になればいいなと思います。

学生 B：今は遠隔授業がほとんどなので、コロナが収束したら、多くの授業を対面で受けたり、学内で友達と長く過ごしてみたいです。

学生 C：一日を大学で過ごしたことがないので、朝来て、授業を受けて、学食で食べたり一日を大学で過ごしてみたい。部活の試合も中止になることも多いので、積極的に参加したいです。

新 井：様々な活動が制限され、思い切りはしゃげない、無意識化でも自粛してしまうんだろうと思います。コロナ禍の率直な意見を聞かせていただきました。ありがとうございました。

まとめ

齊藤学生支援機構長は、学生支援として授業の運営を教育推進課と連携しながらえていかなければいけない。学習支援実体調査も参考にしながら、FD、SD に落とし込んでいく必要がある。あと校友問題、大きな問題となっている「2年生問題」にも文科省が取り上げ始めている。孤立・孤独化させないことが大事だと思っている。今日の話参考にしながら、オンライン交流会などのしかけも考えていきたい。また、授業内の交流づくり、遠隔でもグループワークなどがなければ交流は難しいので、対面と組み合わせながら学生同士の交流を図れる工夫の必要性を感じたと述べられた。

また、新井学生支援推進室長は、遠隔授業でも、録画した動画をアップすれば、復習できるなどいい部分もあり、ネガティブに捉えなければ勉強の仕方も変わってくると感じた。オンラインのグループワークもグループを固定化することで交流ができることがわかった。また、生活の仕方やアルバイト、昼にアルバイトをして、夜に勉強など、生活スタイルも変わってきている。課題を出す時には to do リストの機能を活用するなど、教員も学生への理解が必要だと述べられた。

2021(令和3)年度 佛教大学教員職員合同研修会
シリーズII 「学生支援の新たな地平を探るー学生の声をもとにー」

コロナ禍の長期化と学生

学生支援機構長
齊藤利彦（歴史学部）

1

はじめに

- 2020年2月、ないし3月から本格化したコロナ禍。
- 社会をとり巻く環境は、世界的にも、わが国でも、急激かつ急速に変化変容。
- これまでの習慣や生活規範、社会的な常識は通用しない状況。
- ハレとケの消失ともいえる、日常/非日常のあいまい化。
- 〈ゆるやかに 長期間 世界規模で進展する「災害」〉

東京工業大学保健管理センターカウンセリングチームの提唱（2020）

コロナ禍の長期化と社会における“制限”

- 経済産業省 『経済産業白書 2020』
- 新型コロナウイルス感染症拡大による世界的な経済危機
- 「フェイストゥフェイスのコミュニケーションの制限が本質」と指摘。
- ビジネス社会だけでなく、**教育現場**をはじめ、社会全体に通じる課題。
- 家庭生活・学校生活・対人関係・交友関係・行事関係などの大幅な制限。

- 児童・生徒・学生への計り知れない影響。
- それはいまでも続き、今後も続く可能性。

“制限”が引き起こす不安

参考

コロナ禍のなか、大学生の自殺率が増加傾向の報告（2020年度は、ここ数年のピークスコア）
国立大学保健管理施設協議会「Psychiatry and Clinical Neurosciences」（2021年8/6掲載）

参考

ネット依存・ゲーム（オンラインゲーム）依存の深刻化
世界規模で指摘されるなか、日本では、コロナ禍のなか10代を中心に依存とトラブルが急増と指摘。
（2021年2月東京都実施 家庭における青少年のスマートフォン等の利用等に関する調査）

コロナ禍による“制限”と 学生の不安原因

コロナ禍による長期化する不安状態

遠隔授業と対人関係・対人交流の制限
課外活動の大幅な制限
学園祭や対外交流などの大幅な制限

生活体験や社会体験の欠如
所属感・所属意識の不確かさ
季節感や学年暦の希薄化

キャンパス不適応の初期症状

からだに出るタイプ
からだの不調や心身症的症状、
身体的痛みなど

こころに出るタイプ
ぼんやりやイライラ、意欲減退・
食欲不振・不眠などの不調、表情
や話し方など

行動に出るタイプ
成績不振や能率低下、ワーカホ
リック、欠席・遅刻・早退など
の回避的行動や衝動的行動など

参考

名古屋大学高等教育センター 第197回招聘セミナー・学生支援担当者セミナー「学生とともに作る“新しい日常”-学生相談・学生支援のこれから-」

学生への働きかけが不可欠

コロナ禍と学生のこころの健康

- 明治安田生命保険「健康」に関するアンケート調査対象 20代～70代までの男女5640人
- 調査期間 2021年7/14～7/27
- 調査エリア・方法 全国 インターネット調査
- 学生回答数133人

- コロナ禍でストレスを感じている65.3%
- 男性59.2% 女性71.3%

- 学生41.3%が「心が不健康になった」と回答。
- 全体23.6%を大きく上回る。

もみじヶ丘病院院長
精神科医 芝伸太郎氏

今後、起こりうるタイムラグの心の病増加の可能性を指摘。

コロナ禍の一定の収束後
コロナ関連精神失調の急増が予測される。
(京都新聞2021年8/30朝刊)

コロナ禍の長期化と新たな学生支援への志向

- コロナ禍の長期化：社会的に深まる不安とストレス。
- 対人関係の希薄化/濃密化による不安とストレス。
- 事態の收拾が見えないことへの不安とストレス。

- 全国規模で、大学生に広がる不安・不安感。
- 生活・将来・授業・交友・就職・社会などに対して。

- 大学として、**新たな取り組み**を考えていく必要。
- 従来にはない学生支援の仕組みが必要

学生支援の新たな地平を探る必要

参考

株式会社共立メンテナンス「コロナ禍における授業状況や生活に関する調査」
2021年1/6～1/22 学生寮「ドリーマー」利用大学生・専門学校生1813名対象 インターネット調査

学生のコロナ禍の三大不安

- 感染
- 将来
- **友人と会えない**

一例 大阪教育大学導入のZoomサポーター制度
学生サポーターによる教員の遠隔授業へのサポート制度。教員へのサポートが遠隔授業への質向上につながり、学生にも多大なメリットが生じている。

「Zoomサポーター」連携・支援フロー(2020/10/1-)




参考：学生向けアンケートにみる学生と交友問題

ー前回シンポジウムの振り返りー

- 2021年7月、全国大学生生活協同組合連合会実施「届けよう！コロナ禍の大学生生活アンケート」
- 「学生生活が充実していない」 46.2%
- 3年生47.0%(昨秋比28.6ポイント増)・4年生47.1% (同33.5ポイント増)。
- これまで低学年に広がっていた充実度の低さが、高学年にまで及んでいる模様。
- 2020年夏段階1年生の友人0人は27.7%。進級した今夏は7.3%。友人数の増加はみてとれる。
- 友人数という意味では、3～4年生よりも1～2年生のほうが数は少ない傾向。
- **複数項目から、2年生の無気力傾向・落ち込み・孤独感などが、他学年より大きいことがくみ取れる。**
- 3年生は将来に対する不安がとても大きく、就職への不安と関係している模様。

おわりに

- 従来にはない学生の不安が、全国規模で長期化・蔓延化。
 - 大学における学生支援の新たな取り組みの必要。
 - 学生が求めるものはなにかを的確に把握する必要。
 - 学生が思っていること、感じていること、取り組んでほしいことを、学生の声から考えていく姿勢。
- 
- 学生支援の新たな地平を探ることにつながるのでは。

2021（令和3）年度コロナ禍における学習実態調査

実施期間：2022年1月13日～2月10日

実施方法：B-net

対象：1・2年生 2842名（休学者除く）

回答：800名（28.1%）

※調査は教育推進機構・学生支援機構と共同で実施した。

Q1. 所属学科を教えてください。

学科	対象者数	回答数	割合
仏教学科	102	31	30.4%
日本文学科	245	69	28.2%
中国学科	109	30	27.5%
英米学科	134	27	20.1%
歴史学科	216	64	29.6%
歴史文化学科	148	44	29.7%
教育学科	283	82	29.0%
臨床心理学科	125	22	17.6%
現代社会学科	396	82	20.7%
公共政策学科	244	63	25.8%
社会福祉学科	539	162	30.1%
理学療法学科	83	33	39.8%
作業療法学科	83	29	34.9%
看護学科	135	62	45.9%

Q2. 現在（2022年2月）の学年を教えてください。

学年	対象者数	回答数	割合
①1年生	1432	505	35.3%
②2年生	1410	295	20.9%
③その他	0	0	0.0%

Q3. 2021（令和3）年度、春学期までの取得単位数を教えてください。

<1年生>

単位数	回答数	割合
①20単位以下	153	30.3%
②21単位～40単位	334	66.1%
③41単位～60単位	18	3.6%
④61単位以上	0	0.0%

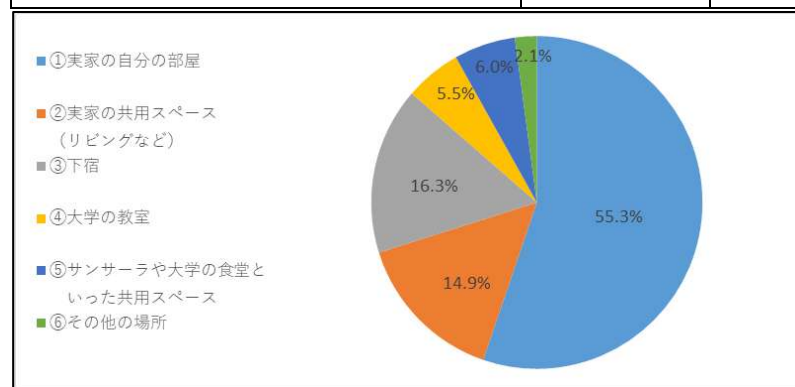
<2年生>

単位数	回答数	割合
①20単位以下	6	2.0%
②21単位～40単位	34	11.5%
③41単位～60単位	120	40.7%
④61単位以上	135	45.8%

Q4. 2021年度秋学期の遠隔授業の受講環境についてお伺いします。

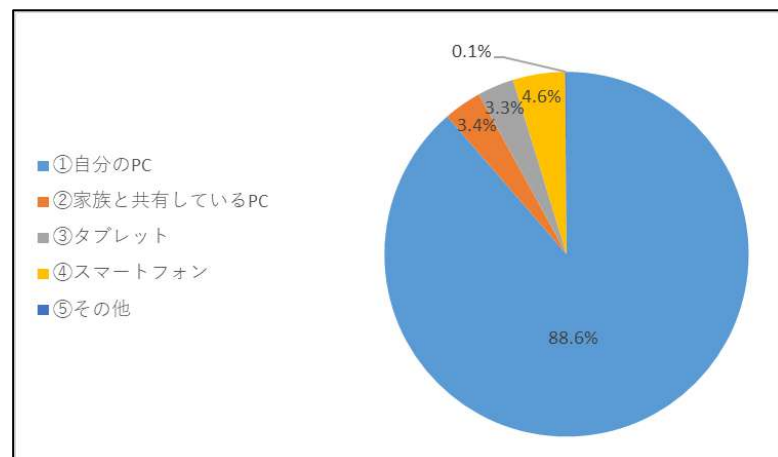
主に遠隔授業を受講していた場所はどこですか。

①実家の自分の部屋	442	55.3%
②実家の共用スペース (リビングなど)	119	14.9%
③下宿	130	16.3%
④大学の教室	44	5.5%
⑤サンサーラや大学の食堂といった 共用スペース	48	6.0%
⑥その他の場所	17	2.1%



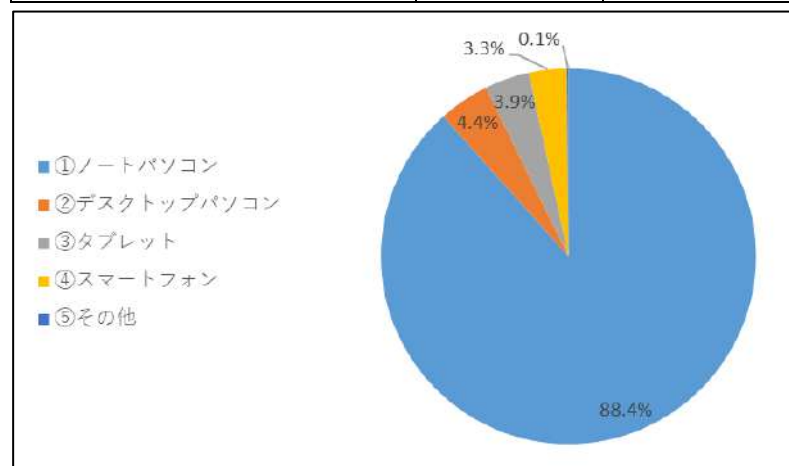
Q5. 主に遠隔授業で使用したデバイスを教えてください。

①自分のPC	709	88.6%
②家族と共有しているPC	27	3.4%
③タブレット	26	3.3%
④スマートフォン	37	4.6%
⑤その他	1	0.1%



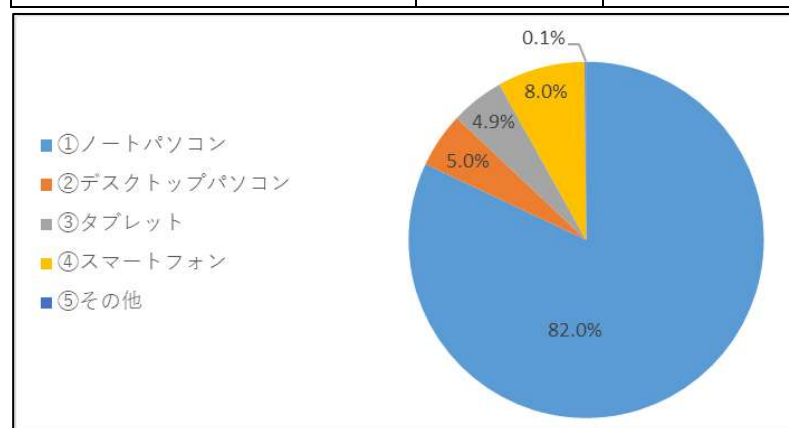
Q6. 遠隔授業（同時双方向型）を受講する場合、あなたにとって適切なデバイスは何と考えますか。

①ノートパソコン	707	88.4%
②デスクトップパソコン	35	4.4%
③タブレット	31	3.9%
④スマートフォン	26	3.3%
⑤その他	1	0.1%



Q7. 遠隔授業（オンデマンド型）を受講する場合、あなたにとって適切なデバイスは何と考えますか。

①ノートパソコン	656	82.0%
②デスクトップパソコン	40	5.0%
③タブレット	39	4.9%
④スマートフォン	64	8.0%
⑤その他	1	0.1%

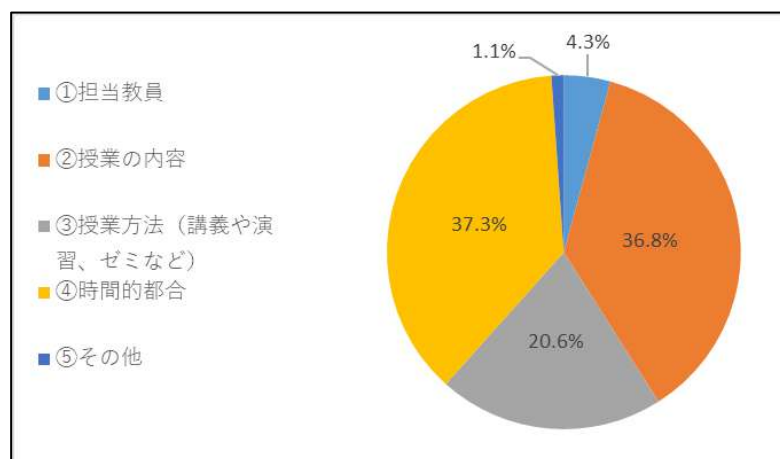


Q8. ハイフレックス型授業を受講する場合、何を基準に授業形態（対面授業、同時双方向型授業、オンデマンド型授業）を選択しますか。

※ハイフレックス型の授業とは、学生が同じ内容の授業を、オンラインでも対面でも自由に選択でき、授業終了後には録画された映像が掲示（Google Classroom）される授業です。

※オンデマンド授業とは、Google Classroomに資料やレジュメ、動画教材が掲出される科目

①担当教員	34	4.3%
②授業の内容	294	36.8%
③授業方法（講義や演習、ゼミなど）	165	20.6%
④時間的都合	298	37.3%
⑤その他	9	1.1%

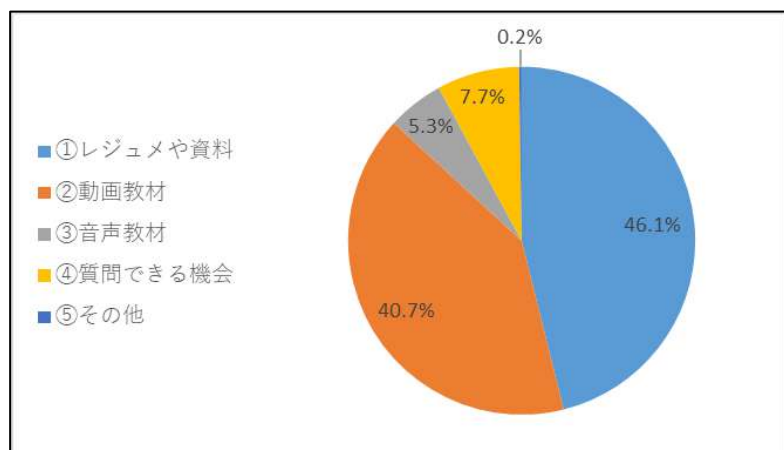


Q9. 「⑤その他」を選択した場合、その内容を教えてください。

- ・大学までの電車通学に不安要素を感じるため、大学に行かなければならない用事がある場合にはその日の授業はすべて対面で受ける。
- ・オンライン授業が苦手です。対面という選択肢があるなら先生や授業の内容に左右されず、対面授業を選択します。
- ・コロナウイルスに感染するのが怖いので、授業形態を選べる場合はできるだけ遠隔授業を選んでいきます。
- ・全てに該当
- ・出席点が取れるかどうか
- ・基本的に対面で受けられる講義は対面で受ける
- ・わからない
- ・コロナの感染者の状況

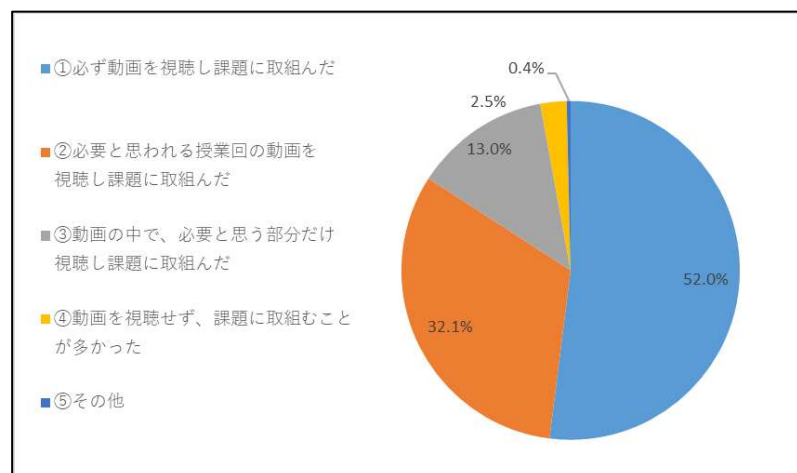
Q10. オンデマンド型授業で学習効果の高いコンテンツは何ですか。 ※複数回答可

①レジュメや資料	588	46.1%
②動画教材	519	40.7%
③音声教材	67	5.3%
④質問できる機会	98	7.7%
⑤その他	3	0.2%



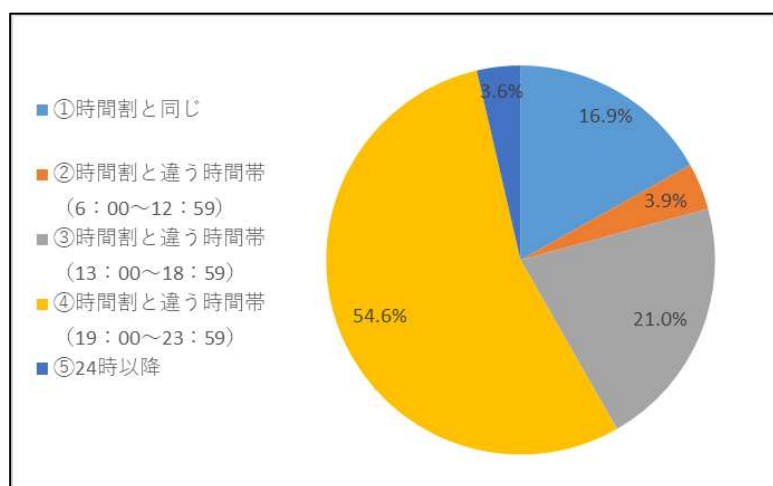
Q11. オンデマンド型授業を受講する際、動画が掲出されている場合それを見て課題に取り組みましたか。

①必ず動画を視聴し課題に取り組んだ	416	52.0%
②必要と思われる授業回の動画を視聴し課題に取り組んだ	257	32.1%
③動画の中で、必要と思う部分だけ視聴し課題に取り組んだ	104	13.0%
④動画を視聴せず、課題に取り組むことが多かった	20	2.5%
⑤その他	3	0.4%



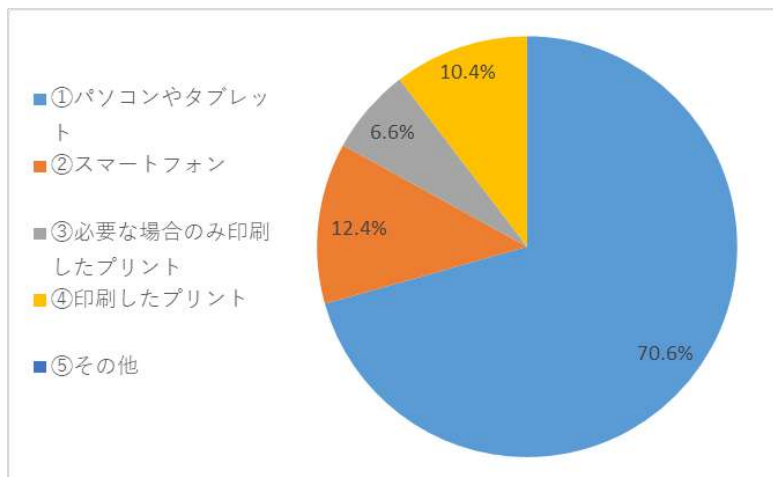
Q1 2. オンデマンド型授業を受講した主な時間帯を教えてください。

①時間割と同じ	135	16.9%
②時間割と違う時間帯 (6:00~12:59)	31	3.9%
③時間割と違う時間帯 (13:00~18:59)	168	21.0%
④時間割と違う時間帯 (19:00~23:59)	437	54.6%
⑤24時以降	29	3.6%



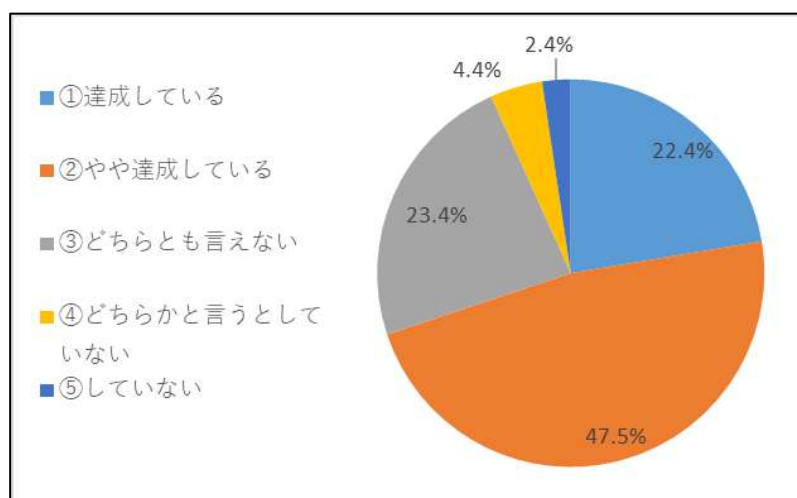
Q1 3. オンデマンド型授業で掲出されている資料は、どの方法で閲覧することが多かったですか。

①パソコンやタブレット	565	70.6%
②スマートフォン	99	12.4%
③必要な場合のみ印刷したプリント	53	6.6%
④印刷したプリント	83	10.4%
⑤その他	0	0.0%



Q14. 15回のオンデマンド型授業終了後、シラバスに記載されている到達目標を達成していると思いますか。

①達成している	179	22.4%
②やや達成している	380	47.5%
③どちらとも言えない	187	23.4%
④どちらかと言うとしていない	35	4.4%
⑤していない	19	2.4%



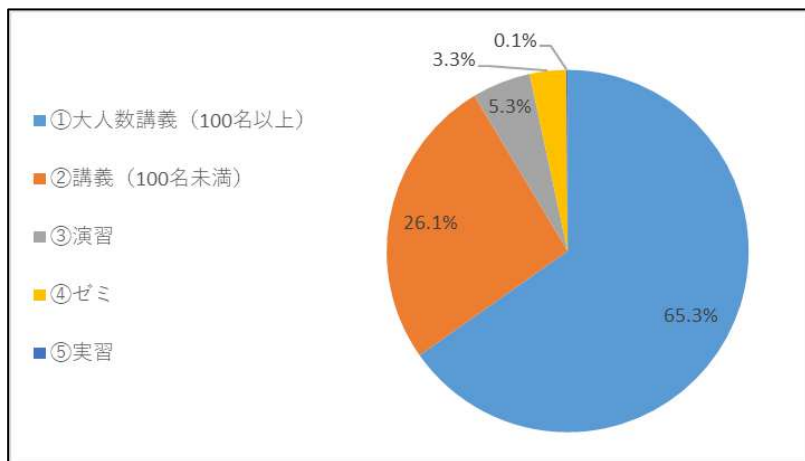
※Q15～Q19の結果は非公表

Q20. オンデマンド型授業で、一番効果が期待できる授業方法は何だと思いますか。

※講義科目＝教員が知識や情報の伝達を目的に、講演が主となる科目

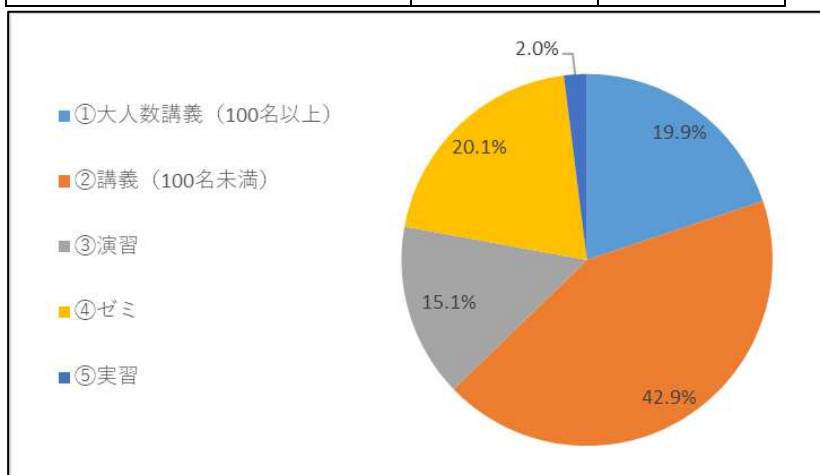
※演習科目＝グループワークや発表等、学生が自主的に考え、議論などを伴う科目

①大人数講義（100名以上）	522	65.3%
②講義（100名未満）	209	26.1%
③演習	42	5.3%
④ゼミ	26	3.3%
⑤実習	1	0.1%



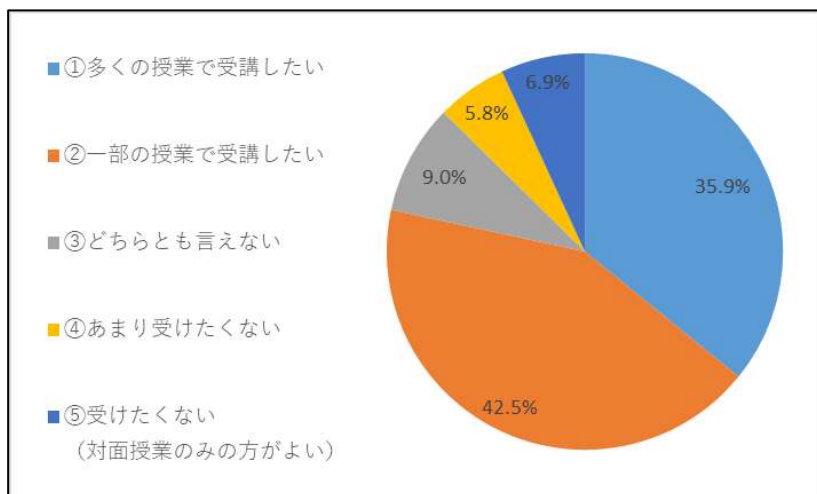
Q2 1. 同時双方向型授業で、一番効果が期待できる授業方法は何だと思いますか。

①大人数講義 (100名以上)	159	19.9%
②講義 (100名未満)	343	42.9%
③演習	121	15.1%
④ゼミ	161	20.1%
⑤実習	16	2.0%



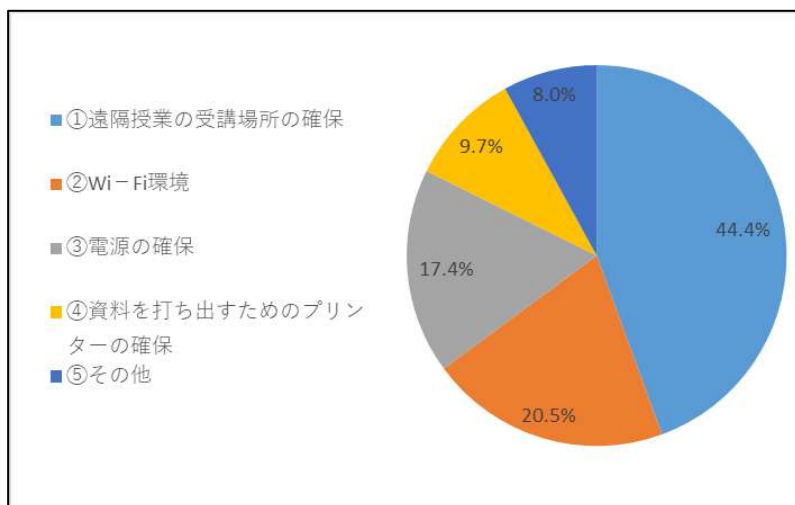
Q2 2. 今後、コロナが終息もしくは感染が落ち着いた場合、引き続き遠隔授業を受講したいと思いますか。

①多くの授業で受講したい	287	35.9%
②一部の授業で受講したい	340	42.5%
③どちらとも言えない	72	9.0%
④あまり受けたくない	46	5.8%
⑤受けたくない (対面授業のみの方がよい)	55	6.9%



Q23. 同じ曜日に対面授業と遠隔授業（同時双方向・オンデマンド）がある場合、困ることは何ですか。 ※複数回答可

困る理由	件数	割合
①遠隔授業の受講場所の確保	588	44.4%
②Wi-Fi 環境	271	20.5%
③電源の確保	231	17.4%
④資料を打ち出すためのプリンターの確保	128	9.7%
⑤その他	106	8.0%



Q24. (Q23で⑤その他を選択した方への質問) 具体的に教えてください。(108名回答)

- ・スペックがなくてガクついたりするのに合わせ Wi-Fi が不安定でよりひどい環境で受けることになる。
- ・対面?遠隔?対面のように、サンドイッチだと忙しい。対面教室から図書館（自習ブース）へ走ることもしばしば。
- ・家までや学校までの移動時間、例えば1限がリモート（同時双方向型）で2限が対面だった場合、1限の時間帯に学校にいないと（学校でリモートを受ける形）時間的に2限の対面授業に間に合わなくなるなど
- ・移動時間と同時双方向型授業の兼ね合い

- ・居住地が大学から遠いため遠隔授業と対面が同じ日にあればそのために早く大学に登校したり、遅く大学を出ないといけなくなるため時間が余計にかかってしまう。
- ・帰宅に使えるバスが少ない影響で、オンラインでの授業が5限にあると帰宅時間が20時を回って困る
- ・①PCを持って行くなど荷物が増える。②対面授業の直前に遠隔授業がある場合、余分に早く家を出なければならない。(遠隔授業の意味がない)
- ・ネイティブの先生は顔出しやマイクオンをするようにする授業が多く、大学で受けれる環境を探すとすると中々に難しく、カンファレンスエリアでも皆がそこに行くとかぶってしまいハウリングを起こしてしまうので、志津香な環境で声を出せる環境が少ないと感じた。
- ・英米学科は話す授業が多いので他の方に妨げにならないためのスペースとかを凄く気にして受講していました
- ・①に追加という形ですが、遠隔授業の場所がある程度確保されており、5号館などの大教室で話すことができるエリアも設置されていますが、たまにサークルの集まりでその教室に来られることがあり、話始められることがあるので、こちら側としては授業が聞き取りづらいため、あまり遠隔用の教室としては役に立っていないと思う。→空いている小教室などを遠隔の教室にするべきだと思う。また遠隔専用の教室であることを教室入り口の扉などに掲示するべきだと思う。
- ・通学時間。遠方から片道2時間かけて通学しているので、対面と遠隔が連続している、もしくは1コマしか開いていないと、結局キャンパス内で遠隔授業を受けることになり、又、そのために通学時間を調節した結果、所謂ラッシュアワーと通学時間帯が重なってしまい、コロナの感染リスクを抑えるという遠隔授業を取り入れる本来の目的が失われてしまう事態も多い。必修や卒業条件に入っている科目が対面しかないと履修せざるを得ない。又、遠隔授業は課題の質と量が大きくなる傾向がある為、通学中に「もし今日の授業が遠隔だけなら、今通学している時間を課題に取り組む時間にあてられるのに。」とってしまう。
- ・同時双方向型であれば、場所の確保が1番困ります。オンデマンドであれば、そこまで問題は感じません。
- ・実家から通っているため大学へ行く時間がバラバラで、見通しが立てづらい。
- ・オンデマンドの場合いつその授業を見るかといった時間の使い方
- ・パソコンを学校に持っていく必要があり、荷物が増える
- ・対面授業と遠隔授業が続いている場合、本来より早い時間に学校に来るまたは遅い時間に家に帰ることになる
- ・対面授業が前後にあると移動との兼ね合いが難しい。また、PCと対面での教材を同時に持ち歩く必要があるため、どうしても荷物が増える。
- ・自宅で遠隔授業を受けていると次の対面授業に間に合わないため、早めに自宅を出て大学で遠隔授業も受けなければならないこと。
- ・対面授業の時間に合わせて登校したいのに、登校中にオンライン授業(zoom等)が被る
- ・1時間の対面授業のためだけに大学まで登校する必要がでてくる場合がある。
- ・対面とオンラインを考えて家を出なければならない。
- ・パソコンを持っていくこと
- ・遠隔授業の日に対面授業があると、結局学校で受けることになる(オンラインの意味がない)

- ・時間の確保
- ・移動 時間
- ・その日遠隔授業でリアルタイムがある場合、その授業に出れない。これのどこが効率の良い学習なのかが分からない。
- ・本来であれば大学での滞在時間を短くしないといけないが、同時双方向と対面が連続である場合、結局、同時双方向の時間に登校しなければならないこと。
- ・通学時間などを考慮しないといけない点
- ・登校時間
- ・自宅のパソコンで受講すると休憩時間内に下宿先～大学を行き来しなければならない事
- ・大学までの行き来
- ・同時双方向の遠隔授業が、対面授業よりも1限先にあった場合、通学時間が1時間半の自分からすると、とても辛い。
- ・とくになし
- ・時間の確保
- ・学校から家までは2時間弱かかるため、家に帰っても遠隔授業をうける時間があまりなく、さらに気力が残らない。
- ・時間の確保
- ・対面のための学校への移動中（電車やバス）に遠隔授業が重なる場合とても困る。例えば、同時双方向型授業が1限、対面が2限の場合、家で1限を受けると確実に2限に間に合わないため、通勤通学ラッシュの電車に乗って1限に間に合うように学校に行くか、電車内で授業を受けていた。大学にいるのになぜパソコンで授業を受けなければならないのか。遠隔授業だけの日で学校に行かないことは感染症対策になると思うが、結局対面があるからという理由でみんな学校に行くなら遠隔授業に何の意味があるのか、それならクラスで授業をさせてほしい。
- ・定期代
- ・通学に時間がかかってしまうため、遠隔授業中に移動が必要になることがある
- ・同時双方向授業の後に対面授業がある場合、早い時間に大学に登校しないとイケない。
- ・対面授業の教室と遠隔授業の受講場所との移動
- ・遠隔授業を家の外で受けないと行けなくなる可能性があること。外出や人との接触をささるための遠隔授業なのに、外に出て遠隔授業を受けているというのはおかしいので、遠隔授業と対面授業が連続した場合のために全ての授業の映像を録画してオンラインに掲出してほしいです。
- ・学校までに距離があり、行きかえりで時間がかかるために受けれる授業と受けられなかったり、受けにくい授業がある
- ・対面授業の前に遠隔授業があると、大学で遠隔授業を受けないとイケないため、感染予防のために遠隔授業にしているはずなのに教室に多くの人がいて、遠隔で行う意味がよく分からなかった。
- ・ハウリングが起こる
- ・学校への移動のタイミング。
- ・対面と遠隔が同日であることが多く、せっかく対面授業で学校に来ているから、遠隔授業も対面でやってほしいと感じた。
- ・準備が間に合わないこと。

- ・移動
 - ・同時双方向と対面が被ると、どのみち学校で受けないと対面の授業に間に合わないため、意味が無い。密の空間で授業をうけることになる。
 - ・資料が多いため、プリントの印刷紙代やインク代がかかる。対面と遠隔が同じ曜日だと、移動時間などを考慮して、遠隔授業でも結局大学に行くことになり、感染対策の意味が無くなる。
 - ・通学時間が大変長いため、移動に手間がかかる場合がある。
 - ・実家から2時間かけて通学しているため四つあって対面が一つだけで他三つが同時双方向だと結局4時まで大学にいないといけないこと。
- ・通学時間の調整
 - ・自宅から大学まで通学に時間がかかり通学中に遠隔授業に参加することも困難なので時間の確保が難しい。
 - ・通学時間と家に帰ってきてから、オンデマンドを受けるので時間が倍かかること。
 - ・自分のPCを持っていくのが遠距離通学で大変
 - ・対面授業のつぎに遠隔授業だと間に合わないことがある。
 - ・通学に時間がかかるので、同時双方向授業のあとの対面授業が間に合わない。
 - ・通学時間が一時間三十分くらいかかるので、遠隔だけで対面がない日はいいが、対面と遠隔が両方ある日は、朝とても早くおきていかななくてはいけないので、遠隔か対面かを固めていただけるとうれしいです。
- ・移動時間ももったいない
- ・通学時間の確保
 - ・遠隔授業の受講場所と対面授業が行われる場所に距離があるため授業に間に合わない時がある。
- ・時間
 - ・授業と授業の合間の時間が長い。
 - ・1限対面のために遠くから大学に来ること。
 - ・時間割の組み合わせ。組み合わせる時にはどちらかわかった上で組み合わせたい。
 - ・オンデマンド型授業の次に対面授業がある場合、オンデマンド型授業の時間を通学時間に利用して対面授業を受けた後にそれを視聴するということが可能だが、同時双方向型授業だとそれが不可能で同時双方向型授業から学校で受けなければならぬため、本来より早い通学時間になってしまうこと。
- ・授業を受ける部屋の環境
 - ・通学時間が長いので、帰る時間が遅くなる。
 - ・先生によってオンデマンド受講は出席点につかないときがあつて混乱する
- ・特になし
- ・登校する手間
 - ・家で受けるために急いで帰らないといけないこと
 - ・特にそのような場面はなかったです。
 - ・遠隔と対面が続いているとどちらかの授業が伸びた場合次の時間に遅れてしまう。
- ・特になし
- ・家から学校までの移動
 - ・対面授業との余裕がなくなり、昼食や休憩をあまり挟めなくなる

- ・行き帰りの時間で遠隔授業に間に合わない
- ・①に該当するかもしれないが、遠隔授業と対面授業が同じ日にあれば結局大学まで行かないといけな
いので時間の確保が難しい。学部学科、学年によって対面授業がある曜日とオンデマンドのみの曜日を
分けてもらいたい。
- ・一時間だけ対面授業で学校に行かなくてはならないものもあり、それ以外は遠隔で家で受けれるので
少し不便に感じることもある。
- ・家と学校の移動が面倒
- ・時間的な問題。
- ・充電器や普段あまり教科書を使わない授業でたまに教科書を使う場面があり、無駄に荷物が増えるこ
と。正直、教科書をいつ使うのか使わないのかが分かりにくく、教科書を常に持ち歩いてて、でも使わ
ないといった場面が多々あり、無駄に荷物が増えてしまうこと。
- ・対面授業を受けるために、学校に行く過程で遠隔授業に取り組みなければいけないこと。
- ・上記の関係から、実家に帰るにも通学時間が長いためオンタイムでの授業に間に合わないこと
- ・家に帰るための時間と授業が重なってしまうこと。
- ・パソコンを学校に持っていかないといけないので、荷物が重くなる。
- ・パソコンの持ち運びが重いこと
- ・移動時間と講義の時間の兼ね合い。電車のなかで受けたり、逆に受けるのをあきらめて帰ってから見
たりとしている。
- ・1限遠隔で2限が対面の時に1限終わってから家を出たら間に合わないので1限が始まる時間に来な
いといけなことです
- ・なし
- ・時間的都合が合わない
- ・遠隔授業と対面授業が連続している場合、対面授業のために大学に来てそのまま遠隔授業を大学で受
ける時があること(パソコンやテキストなどで荷物が多くなるため)
- ・通学時間の確保
- ・自宅から大学に向かう時間がとれない
- ・集中
- ・移動しないといけない
- ・授業が続いている時の教室への移動
- ・遠隔授業のために早く来たり、受けてから帰るか後で受けるかなど時間の問題もあるなと思います。
- ・1コマの対面授業のために大学に行かなければならないことがある。リアルタイムで遠隔授業を視聴
したくても、通学時間と被ってしまうと観れない。
- ・1日のスケジュールが組みにくいいため、遠隔だけの授業でまとめてほしいです。
- ・時間の都合上、遠隔授業を学校で受けなければいけないこと。 学校で遠隔授業を受けなければいけ
ないなら対面で実施してほしい
- ・用紙やインク代が非常にかかること。また学校へ行く日は減るのに設備代は安くないこと。
- ・時間の都合上、遠隔授業を学校に行って受けないといけないこと。
- ・パソコンを持ってくるとのこと。
- ・遠隔授業を家で受けるかどうか、間に合うのかパソコンの持ち運び

FD関連研修会 参加報告書

主 催	ビズアップ総研
企画名称・テーマ	いま全教職員に捧ぐ! 奇跡の高等教育を呼ぶ魔法の杖 「インストラクショナルデザイン(ID)」
開催日・会場	2021年9月10日(金) Zoom (同時双方向)
参加者所属	保健医療技術学部 作業療法学科

参加報告

【研修会の趣旨】

ポストコロナ期の新たな授業・研修設計に悩んでいる全国の大学教員や大学職員を対象とし、「経験、勘、度胸、自己流」から脱却し「学習科学」に基づいた授業を展開するための、「インストラクショナルデザイン」について学ぶことであった。

【研修会の概要】

教授システム学が専門である、熊本大学の鈴木克明先生を講師とし、ZOOM を用いて講義が行われた。セミナー案内文から一部抜粋して、研修会概要を示す。

1. インストラクショナルデザイン(ID)とは
 - ・教育・研修のお悩みを解決する“魔法”の道具
2. インストラクショナル・デザイナーとは
 - ・インストラクターとの違い
 - ・インストラクショナル・デザイナーに求められる資質・能力
3. より「効果的・効率的・魅力的」な授業や学位プログラムにするヒント
 - ・授業レベル：IDを使ったハイブリッド型授業改善の方法
 - ・学位プログラムレベル；IDを使った学位プログラム改革の方法
4. より「効果的・効率的・魅力的」なFD/SDにするヒント
 - ・FD/SDの研修のゴール(目的)を明確にする
 - ・オーセンティックな(実際の業務で起きそうな)課題をゴールに設定する
 - ・「教えない研修」が大学組織と教職員の能力開発を加速させる
5. IDの視点で自身の授業・プログラム・FD/SDの事例を点検してみよう
6. まとめ～今日の学びを活かす行動計画を立てよう

【本学のFD活動における検討課題】

講義で紹介されていた、「カークパトリックの4段階評価モデル」、「ペリーの認知的発達段階説」、「ARCSモデル」、「ガニエの9教授事象」などの用語は今まで知らなかった。学生がモチベーションをもって、主体的に授業に参加できるような教授法の参考になると感じたので、学びを深めていきたい。

本学の教育学部の教員で、学習心理学についてご専門にされている先生がおられれば、学ばせて頂きたいと感じた。また学生と面談をする機会も多いので、学生の成長をサポートしたいと思い、独学でコーチングについて文献から学んではいるが、FD研修会で専門の講師から学ぶ機会を頂けると有難い。学習心理学やコーチングについて学ぶことは、教職員が学生の立場に立ち、効果の高い講義、支援を行うベースになると思われるため、全ての教職員がFDとして学ぶ機会があるとよいと考える。

2021 年度

FD関連研修会 活動報告書

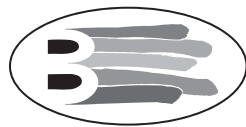
発行 日：2022年11月15日

発行 者：佛教大学教育推進部教育推進課

〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町 96

TEL (075) 491-2141 (代)

URL <http://www.bukkyo-u.ac.jp/>



BUKKYO UNIVERSITY